

公開シンポジウム

ほう けい しゅう こう ぼ  
方形周溝墓から古墳へ

和歌山県内の発掘事例から考える

発表資料集

柏原遺跡の方形周溝墓群

令和3(2021)年2月20日(土)  
公益財団法人 和歌山県文化財センター



柏原遺跡の方形周溝墓群



菖蒲谷遺跡の台状墓



井辺遺跡の墳丘墓（和歌山市提供）



秋月 1 号墳（和歌山県教育委員会提供）

## 開催にあたって

和歌山県内の墓制は、前方後円墳が定着して以降のものは、古くから知られていました。しかし、和歌山市で出現期の古墳である秋月1号墳が1985年に発見されて以来、弥生時代の墳墓や古墳時代への移行期の墓が県内各地で確認され、注目を浴びるようになりました。弥生時代の墳墓として代表的なものに、県内最多の方形周溝墓を検出した橋本市の柏原遺跡や、複数の台状墓を検出した和歌山市の菖蒲谷遺跡などがあります。また、弥生時代から古墳時代への移行期の墓には、前方後方形の墳丘墓を検出した和歌山市の井辺遺跡が知られています。

シンポジウムでは、これら過去の調査事例を振り返りながら、弥生時代から前方後円墳出現までの和歌山県の墓制に迫っていきます。

最後になりましたが、この会を開催するにあたり、ご協力をいただきました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

令和3年2月20日

公益財団法人 和歌山県文化財センター  
理事長 櫻井敏雄



## 開催日程

公開シンポジウム

「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～」

■開催日時：令和3年2月20日（土）13：00～16：30

13：00 開会挨拶 井上 拳宏：（公財）和歌山県文化財センター

### 発表

13：10～13：45 基調報告「橋本市柏原遺跡の方形周溝墓群」

丹野 拓：（公財）和歌山県文化財センター

13：45～14：20 基調報告「和歌山市菖蒲谷遺跡の再検討 一尾根と谷に築かれた台状墓一」

河内 一浩：元（財）和歌山県文化財センター

14：20～14：30 休憩

14：30～15：05 基調報告「和歌山市井辺遺跡の墳丘墓群」

菊井 佳弥：（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団

15：05～15：40 基調報告「和歌山市秋月1号墳等の発掘調査」

黒石 哲夫：和歌山県教育委員会

15：40～15：50 休憩

### 討論

15：50～16：30 「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～」

各発表者

コーディネーター 土井 孝之：（公財）和歌山県文化財センター

16：30 閉会

■会場：イオンモール和歌山 3階イオンホール  
和歌山市中字楠谷573

■主催：公益財団法人和歌山県文化財センター

■後援：和歌山県教育委員会、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

## 発表資料集目次

### ■開催にあたって

### ■開催日程

### ■発表

- 基調報告「橋本市柏原遺跡の方形周溝墓群」…………… 7  
丹野 拓：(公財)和歌山県文化財センター
- 基調報告「和歌山市菖蒲谷遺跡の再検討 ―尾根と谷に築かれた台状墓―」…………… 15  
河内 一浩：元(財)和歌山県文化財センター
- 基調報告「和歌山市井辺遺跡の墳丘墓群」…………… 23  
菊井 佳弥：(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団
- 基調報告「和歌山市秋月1号墳等の発掘調査」…………… 33  
黒石 哲夫：和歌山県教育委員会

### ■誌上発表

- 「海南市亀川遺跡の発掘調査」…………… 39  
矢倉 嘉人：海南市教育委員会
- 「美浜町・吉原遺跡の墓域」…………… 43  
田之上 裕子：(公財)和歌山県文化財センター
- 「方形周溝墓から古墳へ ―日高地方の尾ノ崎遺跡・片山遺跡の事例から―」…………… 49  
川崎 雅史：(公財)和歌山県文化財センター

---

### —記—

- 1 本書は、シンポジウム「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～」の発表資料集である。
- 2 本シンポジウムを開催するにあたり、ご協力をいただいた多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表す。
- 3 本書の編集は、森田真由香（(公財)和歌山県文化財センター）が担当した。
- 4 このシンポジウムは、令和2年度国宝重要文化財等保存・活用事業費（和歌山県内地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）の補助金を受けて実施している。

# 橋本市柏原遺跡の方形周溝墓群

(公財)和歌山県文化財センター 丹野 拓

## ◆ 1. はじめに

古墳時代の前方後円墳や円墳に対して、弥生時代の墓の形は一般にあまり知られていないように思う。

北部九州の甕棺墓や出雲・北陸の四隅突出墓、東日本の再葬墓など、各地で特徴的な墓が築かれており、近畿から東日本にかけての地域では、方形周溝墓という墓が築かれていた。

方形周溝墓は、平地で四方に溝を掘った土を真ん中に盛りつけ、周囲と区画した墓である。その低平な墳丘上にあつたはずの埋葬施設は、ほとんど残されておらず、周溝のみが検出される事例が多いことから「周溝墓」と呼ばれている。方形周溝墓は現在では1万基を超える数が確認されており、和歌山県内でも調査事例が増加している(図1)。

本稿では、和歌山県内で調査された弥生時代から古墳時代へと展開する墓のうち、弥生時代を代表する墓域として、橋本市柏原遺跡の方形周溝墓群の発掘調査事例をとりあげる。柏原遺跡で方形周溝墓が発見され、調査が進められていった過程を追体験するような形で、遺跡の紹介をして、和歌山県の弥生時代の典型的な墓域について、紹介したいと思う。

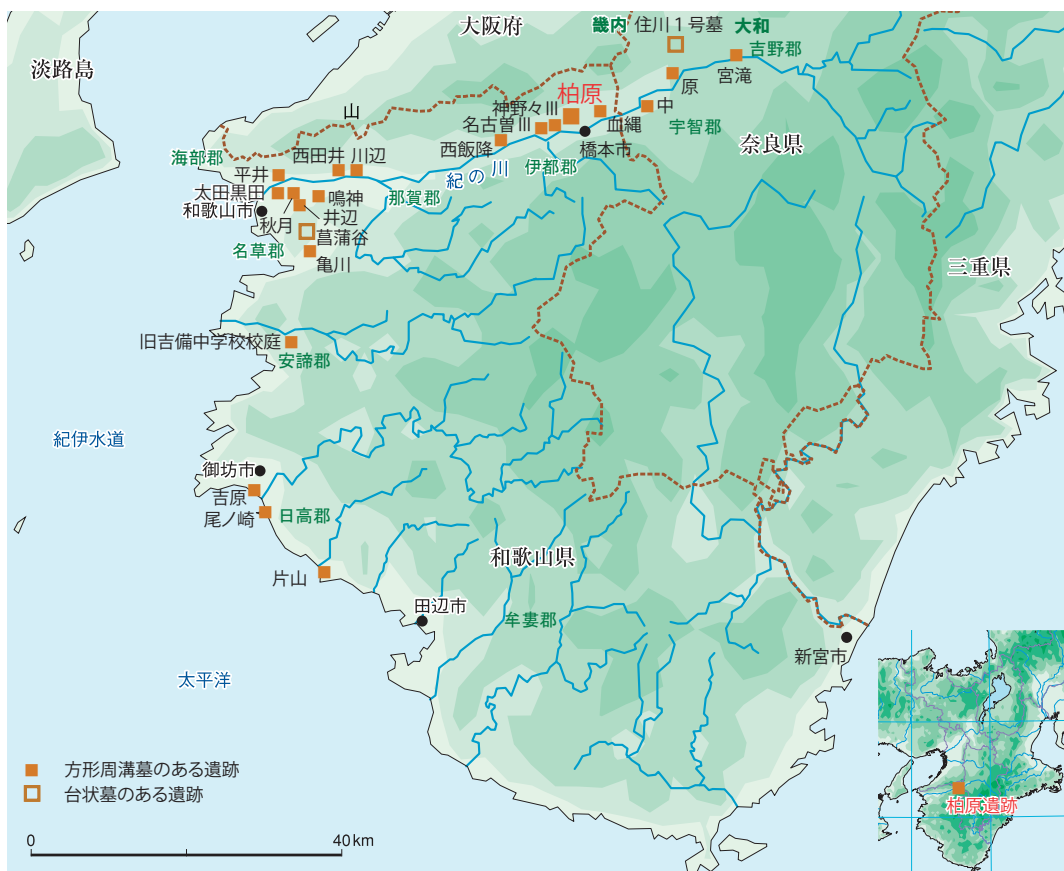


図1 和歌山県内の方形周溝墓関係遺跡



## ◆ 2. 発掘調査の概要

### (1) 調査の経緯と経過 (図2)

**確認調査：**京奈和自動車道建設予定地にて、和歌山県教育委員会が平成12～14年度に試掘確認調査を行った。対象地のほぼ全域で、中世の耕作土層下に、飛鳥時代と弥生時代の遺構面2面が展開していることが確認された。

**発掘調査：**京奈和自動車道建設地計10,061㎡について、和歌山県文化財センターが平成14～16年度に発掘調査を実施した。近世の柏原鋳物師関係とみられる遺構群、中世の土壙墓、飛鳥時代の集落と石槨墓・土坑墓、弥生時代の集落と方形周溝墓群、縄文土器の分布が確認された。

### (2) 弥生時代の集落遺跡の調査成果 (図3)

**居住域：**調査地中央部北側で竪穴建物跡10基を確認した。径約4～7mの円形で、残存深度4～48cm、支柱穴は4基のものが多く、中央に炉を設ける。埋土からは弥生時代中期中葉～後葉の土器が出土している。西群(79・80・134・174)と東群(631・760・821・822・838)に区分可能である。なお、周辺で検出された掘立柱建物については、飛鳥時代の建物と考えられている。

**墓域：**調査地内の西側で5基、東側で13基、計18基の周溝墓が確認されている。周溝墓の墳丘規模は6.1×7.9mから15.0×14.5mを越えるものまであり、周溝幅は0.8～2.2mから2.0～4.9mと比較的広いものまでである。周溝墓の規模が分かるものでは100㎡以下の小規模なものが2基、100～200㎡の中規模のものが8基、200㎡以上の大規模なものが5基であるが、埋葬主体部は確認されておらず、特定の墓の優位性についても確認されていない。



写真1 柏原遺跡の方形周溝墓群(北から)

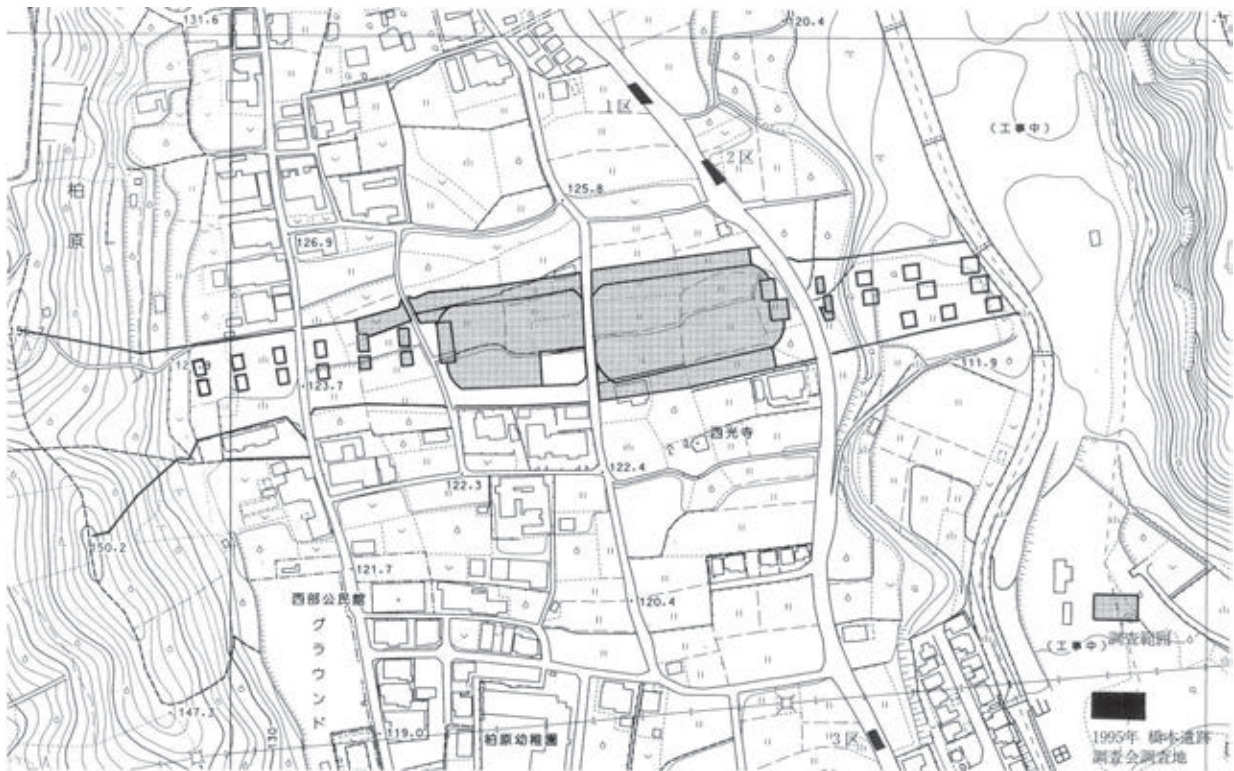


図2 柏原遺跡調査区位置図 (S=1/4000)

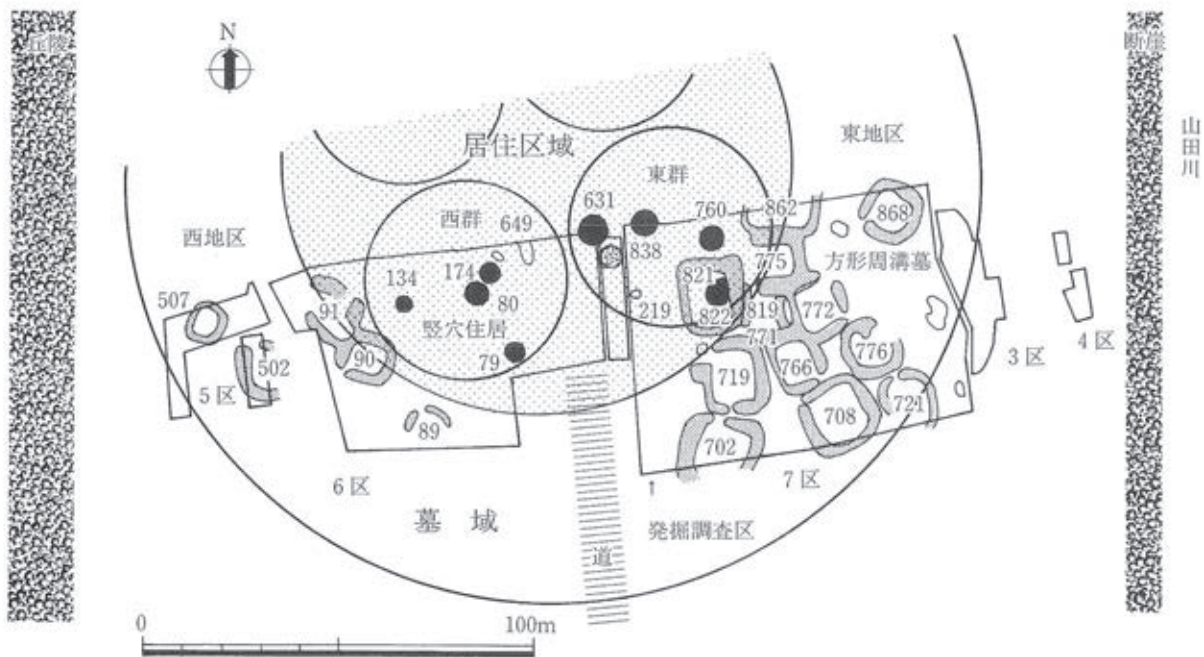


図3 弥生時代集落模式図 (S=1/2000)

### ◆ 3. 発掘調査現場での発見

#### ① 方形周溝墓群の発見

1区で本格的な発掘調査を開始すると、事前の試掘確認調査で見つけた屈曲する溝が方形周溝墓であることが分かった。方形周溝墓は溝の四隅が途切れるタイプが古く、溝がぐると回るタイプが新しいと言われるが、柏原遺跡例は後者であった。

#### ② 周溝墓への通路と出入口を考える

周溝墓 766 の溝が南東部（写真②矢印部）で途切れて、歩いて渡れるようになっている。

周溝墓は生者と死者の世界を区切る区画墓といわれ、陸橋部はその出入口とも考えられている。周溝墓の出入口には、集落の居住域から通路状の部分（例：写真手前を横断）を通して歩いていくことができる。

#### ③ 埋納土器を発見

周溝墓 702 陸橋部の墳丘下部斜面に、弥生土器の壺 4 点と鉢 1 点が埋設されていた。土器は弥生時代中期中葉（Ⅲ様式中頃～後半段階）のもので、胴部下半に意図的に穴があげられている。このような土器は、墓の主の供献されたものと考えられる。土器の上方には大きな石が並べて据えられていた。

#### ④ 出入口のない周溝墓

柏原遺跡の西端で見つかった周溝墓 507 は周溝が全周しており、出入口となる陸橋部がみつからない。

墳丘部も  $6.1 \times 7.9$  m と小さく、家族が追葬される予定のない、出入口のない墓だったのだろうか。

#### ⑤ 隣の周溝墓を削る周溝

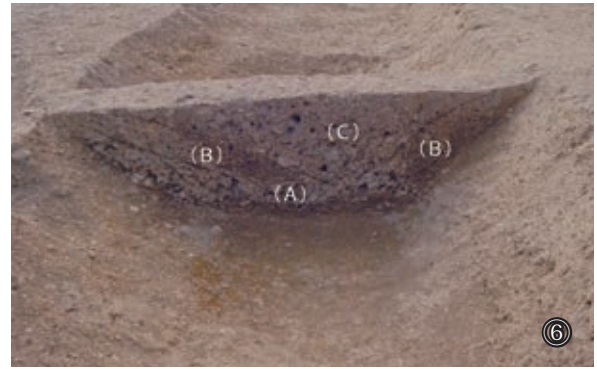
周溝墓が密集する東側中央部では、弧状の周溝をもつ周溝墓 819 が埋められた後で、直線的な周溝を共有する周溝墓 771・772 が築かれた状況を確認した。

周溝墓 819 を壊して周溝墓 772 を造ったのか、819 から 772 に造り直したのか、気になる調査事例である。



## ⑥周溝の埋まり方を観察する

周溝はまず墳丘盛土等の礫入り造成土が崩れて、若干、埋まり始めている（A）。Aからは造成土に入っていた先行集落の土器が混在する。周溝はしばらく残り、長い年月をかけて土壌化した土で、少しずつ埋まっていく（B）。最後に礫混じりの土が流れ込んで一気に埋まっている（C）。



## ⑦周溝墓の下から出てきた竪穴建物

柏原遺跡の集落では、微高地を居住域が占め、その縁辺部に墓域が形成されていた。居住域に近い219方形周溝墓の調査では、周溝に削平された状態の竪穴建物跡が見つかった。居住域の一部は墓域に改変されていたが、墓域が居住域に変わる事例は見られなかった。



## ⑧周溝内埋葬か、それとも？

方形周溝墓の周溝では川原石が多量に出土する場所がいくつか見つかった。周溝墓では墳丘部のほか、周溝内に埋葬施設が築かれることもあるが、これは何だろうか。近くでは飛鳥時代の石棺入り小石槨もみつかっており、後で検証できるように、記録をとり、発掘調査の報告書に掲載する。



## ⑨周溝から何故か土偶が出てきた！

周溝墓719の溝を掘っている作業員から軽石が出たと声をかけられた。見ると土偶のようだったので、すぐに周辺の土を調べなおしたが、他に破片は入っていなかった。



縄文時代の土偶が見つかった堆積には、飛鳥時代の須恵器も混じっており、上流側の土砂が流れ込んで周溝墓が埋没したものとみられる。調査地東側の谷状地形（⑩）でも同様の土砂が流入した様相がみられた。

## ⑩周溝墓の痕跡を探る

調査地東側には山田川の形成した谷があり、谷に近い場所にはよく見ると方形の高まりやL字状の溝が残されている。これらも周溝墓であった可能性を考えながら、3・4区の調査を続けていった。



## ◆ 4. 柏原遺跡の方形周溝墓群の検討

### (1) 周溝墓の配置と数

柏原遺跡の発掘調査では、方形周溝墓として明確な遺構が 18 基報告されているが、これらのほかにも周溝墓と考えられる遺構がある。流路に近い場所に残る削平を受けた方形の高まりや L 字形に屈曲する溝についても周溝墓として認識し、計 23 基の周溝墓群として考える見解を提示しておく。

このうちの 1 基は、報告書でも周溝墓の可能性が指摘されている 7 区の L 字形の溝 765 を周溝とする遺構である (A)。他の周溝墓より小型の周溝墓と考えられる。2・3・7 区に所在する 3 基 (B～D) は、古代の遺物を含む第 5 層を埋土とする流路に削平されているが、方形の墳丘部と周溝の一部が残る。また、4 区にある E は溝が L 字形に屈曲する部分が確認されている。

これらの周溝墓候補となる遺構については、図 4 に A～E として参考表記してみたので、ご確認いただきたい。

### (2) 周溝の堆積物と土器

方形周溝墓の周溝埋土は、上・中層が小礫を多量に含む黒褐色砂質土、下層が黒色砂質土あるいは灰黄褐色砂質土で、地山は小礫を多く含む黄褐色シルトあるいはオリーブ色シルトであった。周溝は集落周辺からの有機物を含む黒褐色砂質土の流入で埋没したものとみられる。

周溝埋土から出土した弥生土器は、集落の居住域に近い周溝墓で多く、同一周溝墓内でも集落側の周溝からの出土が多かった。石器も含む土器片が主体で、居住域から廃棄された土器が多いことがうかがえる。周溝底から出土している土器を含めて、弥生時代中期中葉～後葉 (近畿Ⅲ～Ⅳ様式) のものであった。居住域に近い周溝墓 90 や 219 で出土した土器の 20～30% が生駒西麓産の土器であり、柏原遺跡の北方にある紀見峠を挟んだ河内と紀伊北部の人々の間に文物の交流や人々の移動があったことが確認された。

### (3) 周溝墓の群構成

柏原遺跡の周溝墓は、遺構の重複や埋土・土器等の検討から、いくつかのグループに分かれ、居住域に遠い方から順次近い方へと墓域が拡大したものと考えられている。周溝墓が密集する東部では、最初にやや円形に近い形の 819 周溝墓が築かれたものと考えられるが、後に破壊されている。周溝墓 702 の土器埋納地点沿いに陸橋部が築かれているが、隣接する周溝墓 719 には陸橋部が 2 つつぐられ、周溝墓内を通過して周溝墓 702 の土器埋納地へ行くことが可能な構造となっていることが注目される。同様の構造は周溝墓 708 に対して、居住域側から周溝墓 771 と周溝墓 775 を通過して行ける構造となっており、2～3 世代程度の間、周溝墓内への立ち入り行為 (追葬・祭祀) が継続した可能性を示唆しているように思われる。

居住域に最も近い周溝墓は、507・219 と方形周溝墓 A であるが、これらの 3 基が柏原遺跡で最も新しい段階の周溝墓と考えられている。これらは周溝が全周して陸橋部が判然としない、追葬行為の行われな閉じた構造という印象がもたれる周溝墓であった。また、方形

(第2遺構面(西半))



(第2遺構面(東半))



図4 柏原遺跡方形周溝墓群平面図 (S=1/800)

周溝墓 219 や A は廃絶した竪穴建物を埋めた跡に築かれており、それまでの居住域を削って築かれた墓域であった。周溝墓における単葬と複葬の境界は 80㎡程度とみられており（藤井整 2004）、居住域に最も近い 507・A が単葬墓であった可能性がある。調査区は遺跡の一部であるが、弥生時代中期末で柏原遺跡が廃絶し、高地性集落に移動する直前期の集落の居住域と墓域の様子をうかがわせる興味深い調査事例として注目すべきだろう。

和歌山県内の弥生時代の墓域では、方形周溝墓のほか土壙墓が検出される例が多いが、柏原遺跡では確認されていない。但し、居住域の竪穴建物に近接する 630 ピットは乳幼児の土器棺墓と推定されている。

#### （4）周辺の遺跡との関係

弥生時代中期には、和歌山県内でも太田黒田遺跡や宇田森遺跡など、居住域に溝をめぐらす大規模な集落遺跡が発達し、地域ごとに華やかな装飾を施した弥生土器が生産された。これらの集落で弥生時代中期後半期に柏原遺跡のような方形周溝墓や土壙墓、土器棺墓を伴う集落がみられるが、ほとんどの遺跡が弥生時代後期初頭に廃絶・移動する。

弥生時代後期初頭の集落は丘陵上に築かれるため「高地性集落」と呼ばれる（和歌山市橘谷・天王塚山遺跡等）が、その立地は高地のほか、川の中洲（かつらぎ町船岡山遺跡）などにもみられる。その後、弥生時代後期中葉になると、集落の居住域は河川沿いの微高地に移動する。これらの時期には墓域も、丘陵地や河川沿いに移動するものとみられる。

柏原遺跡の周辺では、後期初頭の高地性集落と墓域として奈良県五条市引の山遺跡と向山遺跡、釜窪丈六堂遺跡住川 1 号墓、後期中葉以降の集落として橋本市血縄遺跡の居住域と方形周溝墓が確認できる。

柏原遺跡の弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓群は、後続する時期に高地性集落と河川沿いの集落への移動、墓域の移動をしたものと考えられるので、今後も周辺での調査が期待される。

#### 【参考文献】

『垂井女房が坪遺跡・野口遺跡・北馬場遺跡・柏原遺跡』（財）和歌山県文化財センター 2007a

『京奈和自動車道橋本道路発掘調査報告会—考古資料から見た紀の川上流域の弥生文化—』（財）和歌山県文化財センター 2007b

藤井整「下植野南遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第 35 冊 2004

#### 【図参照】

図 1：新規作成、図 2～4：県センター 2007a を一部改変

# 和歌山市菖蒲谷遺跡の再検討 －尾根と谷に築かれた台状墓－

元（財）和歌山県文化財センター 河内 一浩

## ◆ 1. 菖蒲谷遺跡の弥生時代中期台状墓

ここで再検討する菖蒲谷遺跡は和歌山市井戸・相坂に位置する。図1の遺跡分布図でもわかるように標高120mの独立丘陵に立地し、254の菖蒲谷遺跡は丘陵北端に分布する弥生時代中期と古墳時代後期の墳墓や古墳である。周辺には256の弥生時代の遺物散布地である千石山遺跡、252・253は菖蒲谷遺跡と重複する古墳時代後期の千石山古墳群、257～259は井戸古墳群が分布し、丘陵の南西部には実態のわからない260の馬場古墳群、261の弥生時代の散布地の馬場遺跡が周知されている。

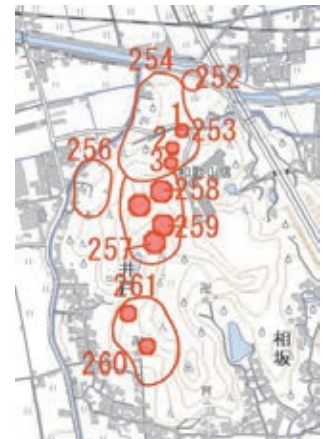


図1 遺跡分布図

菖蒲谷遺跡で墳墓が発見されたのは1987年のことである。発見に至る経過は千石山遺跡や千石山古墳群の隣接地に私立大学の移転計画による。予定地内にも埋蔵文化財の存在が考えられることから5月に分布調査を実施し、大学への進入道路予定地で新たに遺跡が2か所発見され、1987年6月から9月まで工事に伴う事前調査が行われた。調査結果は、2005年に和歌山教育委員会・（財）和歌山県文化財センターから発刊された『発掘調査資料整理概報』に菖蒲谷遺跡として報告されている（和歌山県教育委員会他2005）。以下、『概報』とする。

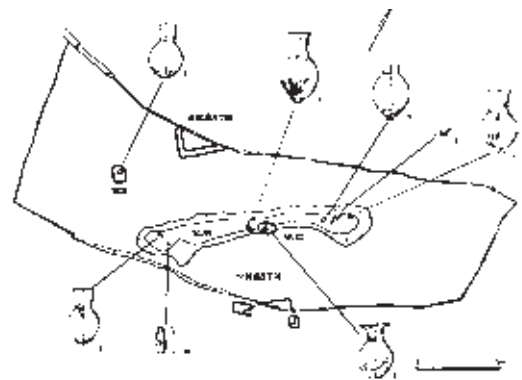


図2 菖蒲谷地区の方形台状墓

『概報』によると、報告者の丹野氏は「調査では尾根を挟んで、東の千石山地区と西の菖蒲谷を調査した。千石山地区では弥生時代中期の方形台状墓4基（S T 0 1～0 4）と奈良・平安時代の遺物散布状況を確認した。菖蒲谷地区では、弥生時代中期の台状墓2基（S T 0 5～0 6）と、古墳時代中期の溝S D 0 1・S D 0 2を確認した。弥生時代中期の千石山地区と菖蒲谷地区は共に、主体部の背面に溝を掘り、台状墓の裾に供献土器を配した墓域であるものと考えられよう。

千石山地区は奈良～平安時代、菖蒲谷地区は古墳時代に遺物の散布・投棄が認められる。菖蒲谷地区のS D 0 1上層から出土した古墳時代中期頃の遺物は、残存状態も良好であり史（マ）料価値も高いものといえよう。」と調査の成果をまとめている。

1987年の調査当時は遺跡名が確定されておらず、「和歌山信愛女子短期大学学校予定地内遺跡」として1988年に調査成果が報告刊行されている（河内1988）。今回その成果に書ききれなかった資料をここで報告し、千石山地区・菖蒲谷地区で発見された尾根と谷に築かれた弥生時代の墓について再検討するものである。



## ◆ 2. 1987年の調査所見

和歌山県文化財センターの発掘調査は、1987年7月20日から同年11月10日まで実施している。私が担当となったのは1987年9月10日からである。

調査所見については、調査翌年に『和歌山県文化財センター年報1987』に報告している(河内1988)。以下、『年報』とする。少し長くなるが以下、抜粋する。

### 【菖蒲谷地区】

5基の方形周溝墓を検出した。(中略)

方形周溝墓1 (図4のST06) 南側が調査区外にあるが、幅1.2~1.8m、深さ0.8mの周溝をもち、一辺9mの規模である。墓壇(3m×1.8m)はその中央に位置する。遺物の出土はなかったが、周溝下層から

供献土器が4点出土した。また上層に古墳時代の土器が大量に堆積していた。

方形周溝墓2 (図3のST05) 北側が削平されているが、東西9.5mの規模である。周溝は幅1.2m~1.8m、深さ0.9mで、供献土器が3点出土している。また溝底から2基の土壇墓(長辺1m)を検出した。墓壇(2.7m×1.8m)は墓の中央にあり、木棺の痕跡を確認している。

方形周溝墓3 (SD04とSD02の間) 西側の周溝が方形周溝墓2と共有し、その規模は東西4.2mである。遺物は若干の土器片が出土したのみで埋葬施設は検出できなかった。

方形周溝墓4 北側周溝の一部を確認しただけで、規模・埋葬施設等の有無は不明である。

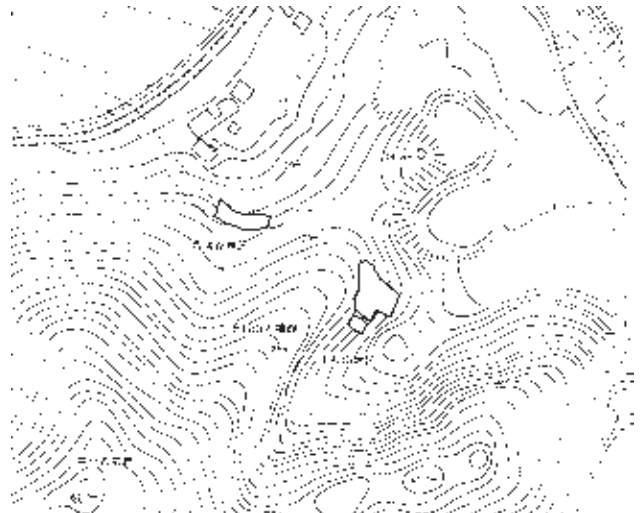


図3 菖蒲谷地区と千石山地区の位置関係図

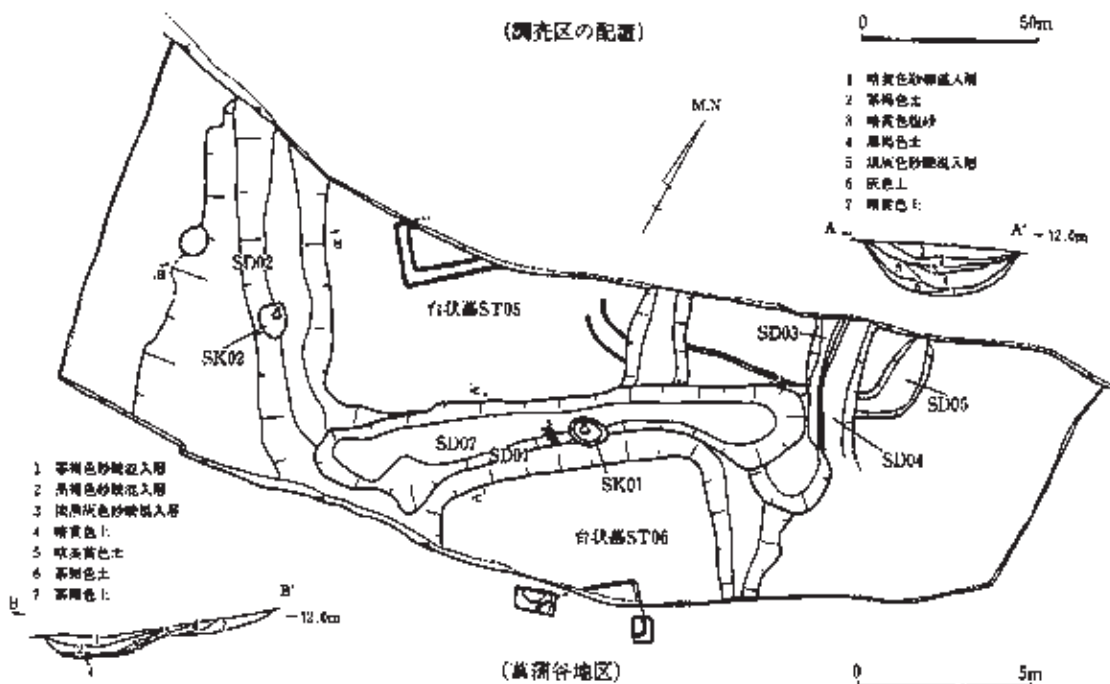


図4 菖蒲谷地区の遺構図(和歌山県教育委員会他2005)

方形周溝墓5 一辺8 mの規模をもつが、大部分が削平され、埋葬施設は検出できなかった。

【千石山地区】 調査対象の尾根で4基の台状墓を検出した。(中略)

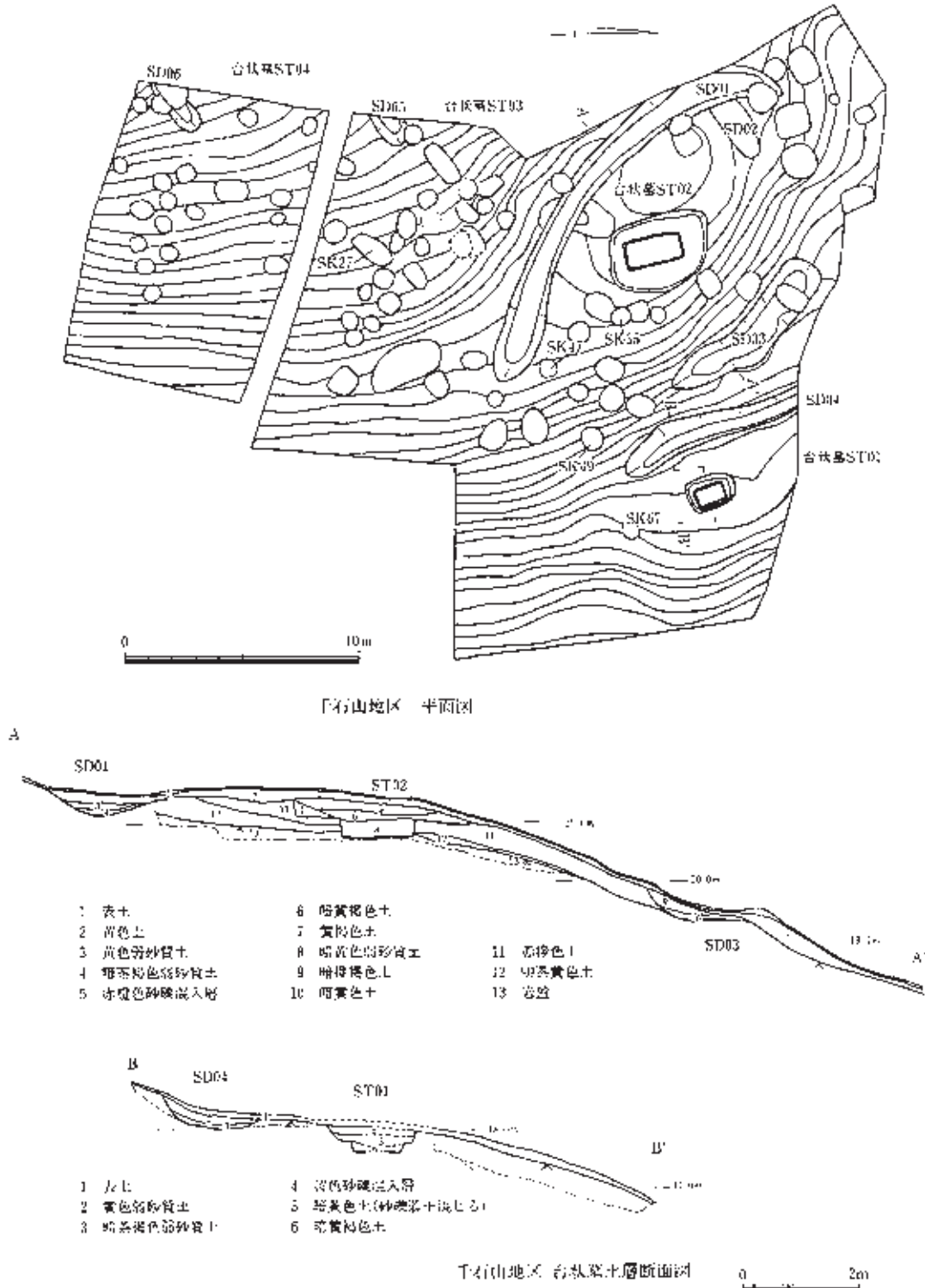


図5 千石山地区の遺構図 (和歌山県教育委員会他 2005)

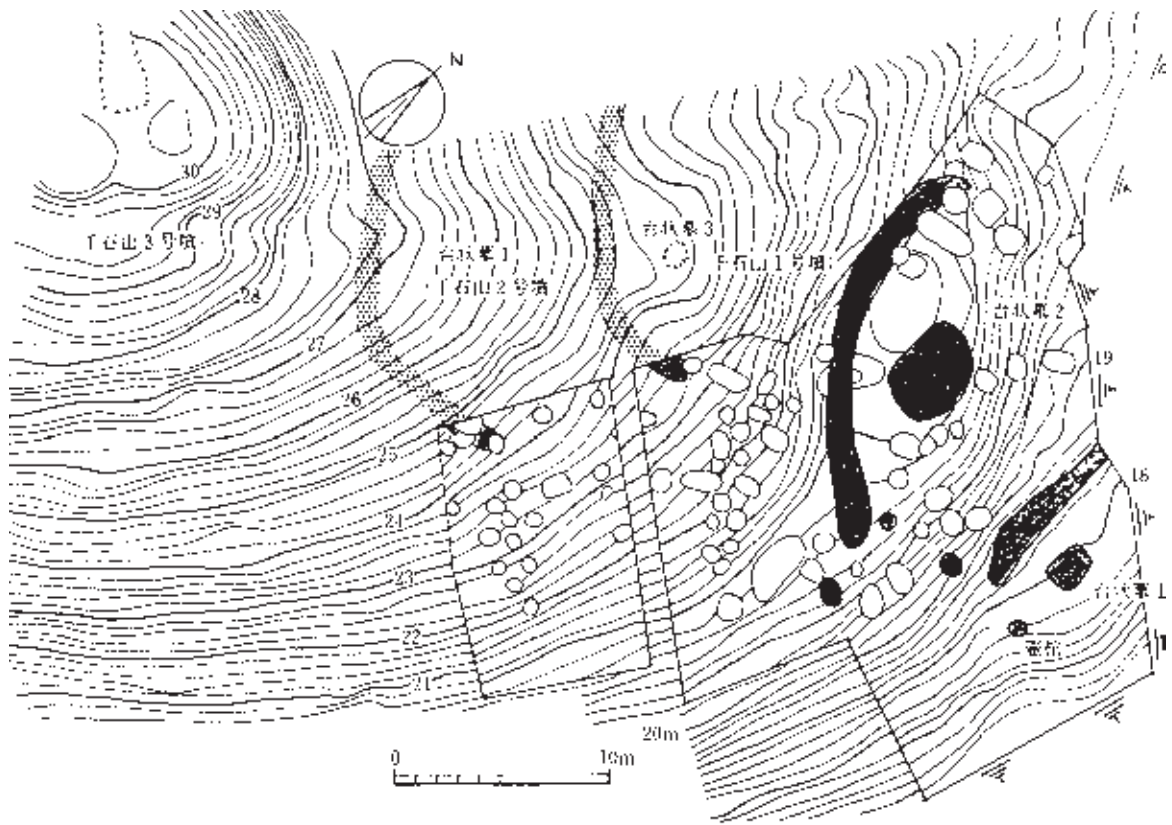


図6 千石山地区の遺構図 (河内 1988)

台状墓1 南北(現存長)7 m、東西5 mにわたって斜面地を平坦にし、幅1.5 mの溝を背後にめぐらせている。周溝からは弥生土器が出土した。墓の中央で2段掘りの墓壙(2.1 m × 1.4 m)を検出したが、遺物は皆無であった。墓の南裾で壺棺を検出した。

台状墓2 南北15 m、東西10 mにわたって斜面を平坦にし、幅1.7 mの溝を背後にめぐらせている。墓の中央に2段掘りの墓壙(4.3 m × 3.2 m)があり、弥生土器片が若干出土した。墓の東裾で壺棺2基を検出した。

台状墓3(千石山1号墳)大部分が調査対象外であり、区画溝の東端を確認した。

台状墓4(千石山2号墳)大部分が調査対象外であり、区画溝の東端を確認し、数片の弥生土器が出土した。

以上が、1987年の調査成果報告の抜粋である。



図7 菖蒲谷地区(東から)千石山地区の遺構図(北から) 河内 1987年撮影

### ◆ 3. 『概報』の相違

冒頭でのべたとおり、2005年の『概報』では『年報』で菖蒲谷地区の5基と報告した方形周溝墓が2基の台状墓として報告されている。図2のSD07を台状墓の背面溝との判断であるが、根拠は「溝からは土師器片が出土しているが、残存良好な弥生土器が供献された状態で出土しており…」(『概報』P14)の記述から土器の出土状況から区画溝と考えているようだ。

SD07から出土した土器は、右の図(図8)に提示した。1～6と10は弥生土器の直口壺である。8はSK01出土の広口壺、9はSK02出土の直口壺である。供献土器を埋めた土坑として捉えている。

『概報』ではSD07を覆うSD01は古墳時代中期の溝として理解している。SD02は2段に落ちる谷状の遺構とし、SD03の性格は言及されていない。さらにSD04、SD05については無遺物のうえ土色が地山と類似していることから遺構でない可能性が高いとする(和歌山県教育委員会2005)。

調査担当者としては、遺構の検出や埋土の掘削は土質や硬度の違いでSD04並びにSD05を溝として認識し、それぞれ墓の溝と解釈した。『年報』で述べたように方形に囲む溝の存在により方形周溝墓としたのである。千石山地区の尾根地形と違い、谷地形に近い平坦である菖蒲谷地区での背後を溝で区画をするには無理があると理解している。

次に千石山地区の相違点をあげる。『年報』ではSD03は存在しない。『概報』には台状墓ST02とSD04の間に溝として報告しているが、図5の断面図を見てとおりST02側に立ち上がりは認められるが、ST01側は平坦で立ち上がりはない。私は台状墓2の北側に作った平坦面と意識している。

『概報』と『年報』の台状墓の規模が異なる。今回再検討をしたところ、台状墓1は長辺8m以上、短辺7mに台状墓2を長辺17m、短辺10mを呈すると規模を修正したい。なお、千石山1号墳は台状墓3、千石山2号墳は台状墓4としての理解は今も変わらない。

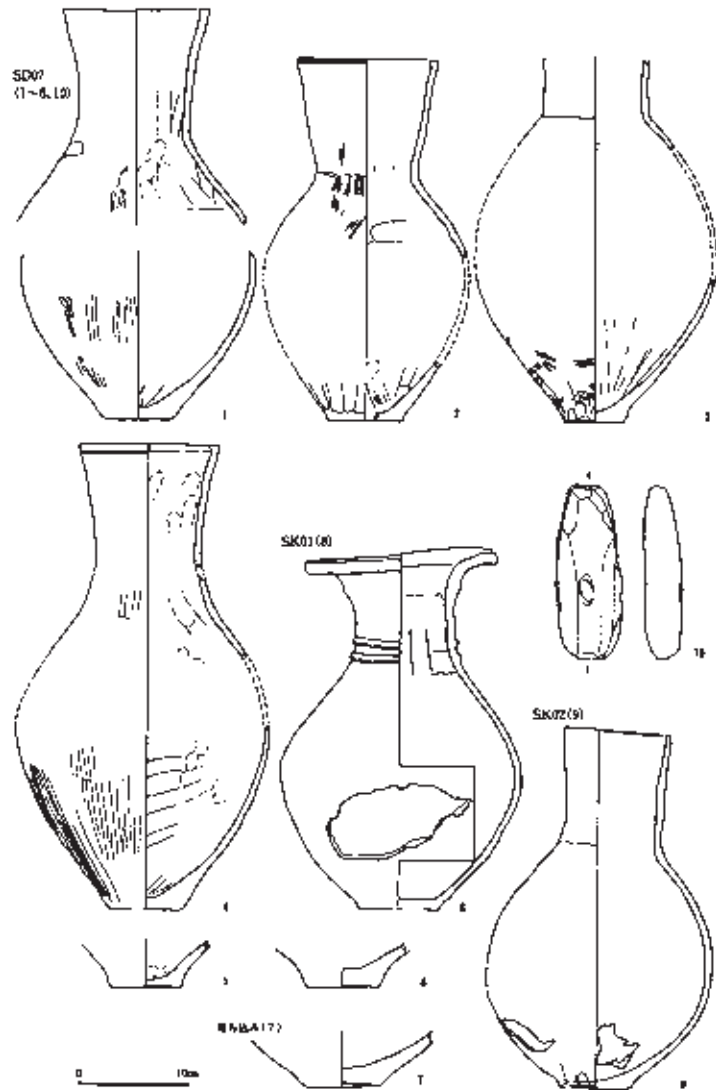


図8 菖蒲谷地区出土土器

#### ◆ 4. 方形周溝墓群の存在について

菖蒲谷地区の方形周溝墓は、掘削された溝には切り合いがあることを調査の段階で確認している。右はSD01とSD07の調査時のメモである（図9）。

溝からは大量の古墳時代中期の遺物が出土したので、調査段階では古墳の周濠として作業を進めたが、溝底面の弥生土器の出土から方形周溝墓の溝と理解した。報告者は古墳時代の土器が出るために同時期の溝と理解しているが、私は溝が埋没過程で混入したと考える。調査段階でそう考えたのは、①古墳時代に掘削された溝であればその機能は何か。

②完形の弥生土器が出土する状況は弥生時代の溝に重なるようにして古墳時代に溝を掘ったとは考え辛い。③古墳時代の土器と石製模造品が出土したことにより古い墓に対しての祭りごとと理解し、埋まり切っていない方形周溝墓の溝に須恵器や土師器を投げ入れたと考えた。

菖蒲谷地区に方形周溝墓が群集する確証は、和歌山県立紀伊風土記の丘所蔵の弥生中期の壺形土器である。口縁部が欠損するほかは遺存する（図10）。出土地は、和歌山市井戸米山千石山で、1971年の寄贈資料である。この土器が菖蒲谷地区の調査区西端に隣接する果樹園開墾時に出土したことを調査中に聴いている。方形周溝墓4の周溝延長推定ラインと一致する。

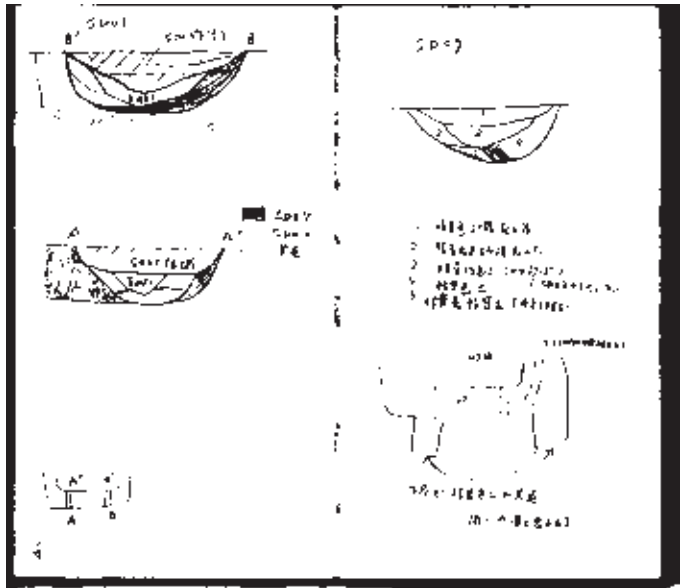


図9 菖蒲谷地区溝断面土層略図

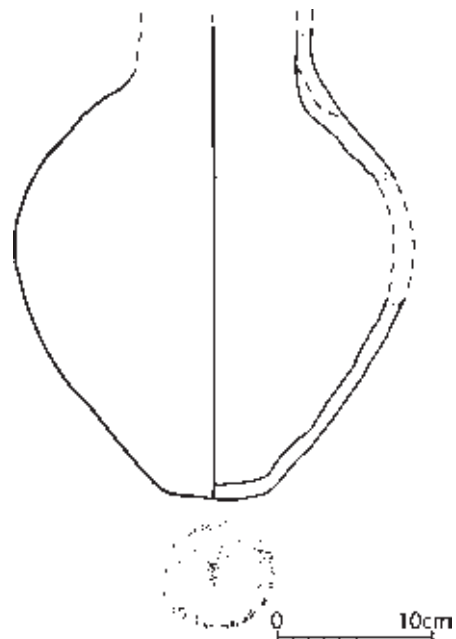


図10 紀伊風土記の丘所蔵土器

## ◆ 5. まとめにかえて

1987年に明らかになった弥生時代中期の墓は、丘陵の尾根と丘陵平坦地に築かれている。墓の区画溝の捉え方で、2005年には墓の背面溝の存在から台状墓として理解され、『概報』にて報告された。和歌山県文化財センターも『概報』の調査成果を支持した（和歌山県文化財センター2008）。2005年までは菖蒲谷地区では5基の方形周溝墓が、千石山地区では4基の台状墓が築かれたとして引用されている（和歌山市史編纂委員会1991）。

この度、1987年の調査内容の報告をする機会を得たので現場担当者の記録を提示した。調査当時は次々と申請される現場作業に追われて整理作業ができない状況で、不幸にして整理の機を逸した。今回『概報』の内容を否定するのではなく、信愛女子短期大学学校用地の遺構に対する私の見解は今も『年報』のとおりである。今後菖蒲谷地区や千石山地区の墓について再検討するにあたっては本書に掲げた記録が参考になれば幸いである。

最後に、千石山地区の調査区西隣に位置する千石山3号墳の測量を実施した。図12の墳丘測量図から現状では直径約19m、高さ3mの円墳と考えている。南側に墳丘背後を堀切が約2mの幅で弧状に墳丘裾を巡る。また墳丘の西側に開口する状況で、幅2m×奥行き3mの凹みがあることから横穴式石室の盗掘孔と考えている。墳丘裾からは土器片が表採された（図11）。須恵器の坏身で、陶邑古窯址群のTK43型式と考えられる。盗掘で掘り出された副葬品であろうか。土器から古墳の築造は、6世紀中葉と推定している。

千石山古墳群は、図1の252が千石山5号墳で、253は3基の古墳が周知されている。千石山1号墳と千石山2号墳は1987年の調査で台状墓であることはすでに述べた。

図1の257が井戸1号墳、258が井戸2号墳、259が井戸3号墳である。2号墳には墳丘中央部に4m×2.5m、深さ1mの窪みがあり埋葬施設の存在が考えられる。遺物等が知られていないので築造時期については不明である。

これらの古墳は菖蒲谷地区で出土した須恵器や土師器とは時期差がある。古墳時代中期の古墳の存在を考えるのはやはり無理があろう。

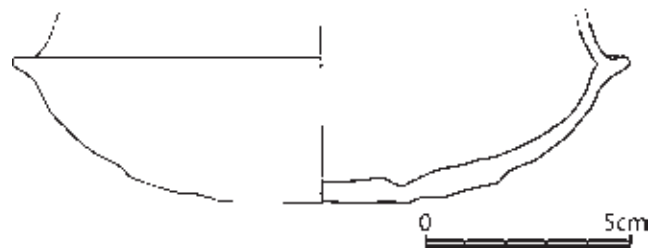


図11 古墳表採須恵器実測図

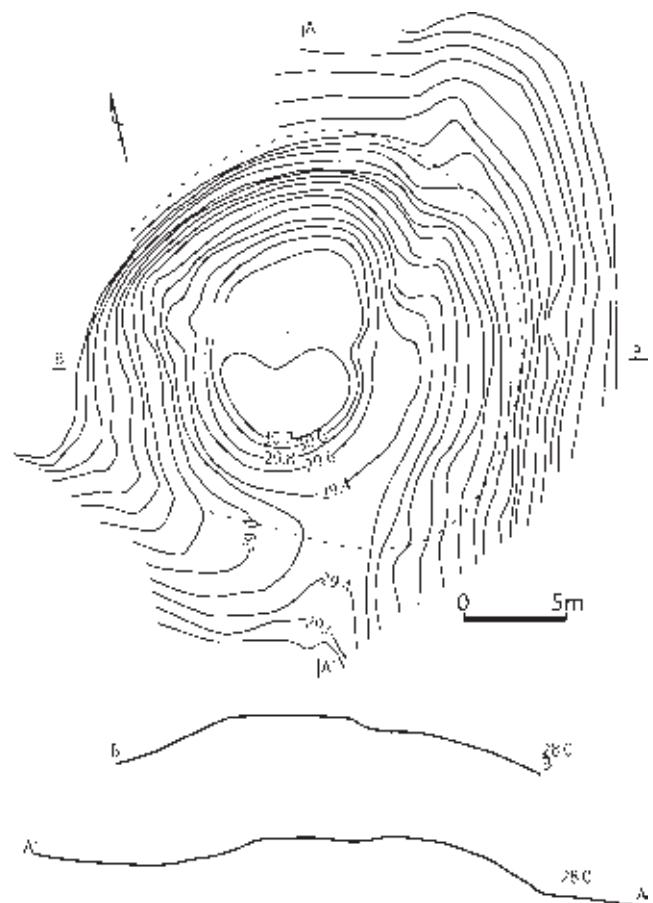


図12 千石山3号墳墳丘測量図

## 【参考文献】

- 河内一浩 1988 「和歌山信愛女子短期大学学校用地内遺跡の調査」『和歌山県文化財センター年報 1987』(和歌山県文化財センター)
- 和歌山県教育委員会 2005 『緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報』
- 和歌山県文化財センター 2008 『紀の国の歩み 財団法人和歌山県文化財センター発掘 20年の記録』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1973 「寄贈資料紹介 弥生土器」『紀伊風土記の丘年報』第1号
- 和歌山市史編纂委員会 1991 『和歌山市史』第1巻自然・原始古代・中世

## 【追記】

学校用地の分布調査を発掘調査が実施される2カ月前に丘陵を踏査、そして一部確認調査をしているが、その結果は未だ報告していない。この紙面をお借りして記録の抄録を提示し、調査担当者の責務を果たしたい。

分布調査は、1987年4月27日から5月15日まで実施した。

- 4月27日 学校校用工事予定地内の踏査、井戸古墳群や千石山古墳群の位置も確認。千石山3号墳は盗掘らしき窪みがあるものの墳丘は良好に残る。
- 4月28日 踏査継続。古墳状隆起を2ヶ所発見。
- 4月30日 古墳状隆起トレンチ調査。1ヶ所から土壇状の落ち込みを確認している。落ち込みからは、図13の提示した壺形土器の底部片が出土した。弥生時代中期と考えられる。もう1ヶ所から幅60cm前後の溝を検出。古墳の可能性あり。
- 5月1日 雨天につき作業中止。
- 5月6日 県道脇の進入路の田んぼにグリット3ヶ所設定し約1.2mまで掘り下げ。粘土の水平堆積で7層分層可能。4層から摩耗した土器片(瓦器、土師器)が出土した。同時に古墳の周濠の調査。円墳の可能性あり。
- 5月7日 田んぼに新たなグリット3ヶ所設定し1.5mまで掘り下げ。遺物無し。
- 5月8日 古墳の範囲に杭を打ち境界明示。埋め戻し。  
※後日の調査の千石山地区台状墓1丘陵の登り口で土器片表採。周辺から土器が出土していることを知る。
- 5月11日 丘陵登り口にトレンチ2ヶ所設定する。土器が出土。
- 5月12日 さらに4か所トレンチ設定する。1ヶ所から大量の須恵器が出土する。
- 5月13日 古墳の周濠か。弥生土器片の出土が確認。※後日の調査の菖蒲谷地区方形周溝墓
- 5月14日 土器の取り上げ。
- 5月15日 分布調査、試掘調査終了。

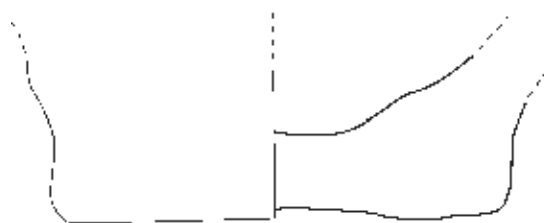


図13 学校予定地内出土土器実測図(原寸)

# 和歌山市井辺遺跡の墳丘墓群

(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井 佳弥

## ◆ 1. はじめに

井辺遺跡は、紀の川左岸、福飯ヶ峯丘陵北西の標高 3.0 m 付近の沖積地上に位置し、遺跡範囲は、丘陵に沿って南北約 0.5km、東西約 1.5km で扇状に広がる。周辺の遺跡として、西に神前Ⅱ遺跡、北西に津秦遺跡、北に津秦Ⅱ遺跡、井辺Ⅱ遺跡、北東に井辺Ⅰ遺跡、南に神前遺跡、南の福飯ヶ峯丘陵裾部には岡崎縄文遺跡、井辺Ⅲ遺跡の他、丘陵上部には井辺前山古墳群が所在する。

井辺遺跡の既往調査は、80 次余にわたり、縄文時代晩期までに形成された微高地上に弥生時代後期後半から古墳時代前期の複数の集落、墓域、畠など、低地に水田とした土地利用が明らかになりつつある(図1)。井辺遺跡では居住域 A～E とした 5 つの集落があり、周辺遺跡でも同時期の集落がみつまっている。井辺遺跡東部に位置する居住域 A 域内では、第 6・7・8・22・24・25・32・41・54・56・73 次調査がおこなわれ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭までの竪穴建物 67 棟、井戸 7 基を検出している(図2・3)。集落規模は地形的制約から第 2 図に示すように直径 300 m 規模と想定できる。遺構が確認されている範囲では、調査面積 100㎡につき 3～4 棟の竪穴住居が検出されている。大型建物は検出されていないが、多数の竪穴建物が検出され、木甲や銅鐸片等の遺物が出土しており、周辺の集落を主導する有力者が居住していた可能性がある。

第 6 次調査：弥生時代後期後半の井戸 1 基や竪穴建物 1 棟、古墳時代初頭の竪穴建物 3 棟

第 7 次調査：弥生時代後期後半の竪穴建物 1 棟、古墳時代初頭の竪穴建物 4 棟

第 22 次調査：弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物 18 棟、

弥生時代後期後半の井戸 3 基

弥生時代後期後半の井戸 (SE-89) から弧帯文の可能性のある文様が彫刻された黒漆塗の木甲が出土した。

第 21 次調査：第 22 次調査の確認調査で、竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性のある落ち込みが検出されている。

第 24 次調査：弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性ある落ち込み、自然流路と報告されている竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性のある遺構が検出されている。

第 25 次調査：古墳時代初頭の竪穴建物 1 棟

第 32 次調査：古墳時代初頭とみられる竪穴建物 1 棟

第 54 次調査：弥生時代後期後半の井戸 2 基、竪穴建物 1 棟

第 56 次調査：弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物 32 棟、井戸 1 基

弥生時代後期後半の 249 竪穴建物から銅鐸片が、250 竪穴建物から碧玉製管玉が、217 竪穴建物から朱が付着した石杵と石皿が出土した。

第 73 次調査：弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物 6 棟



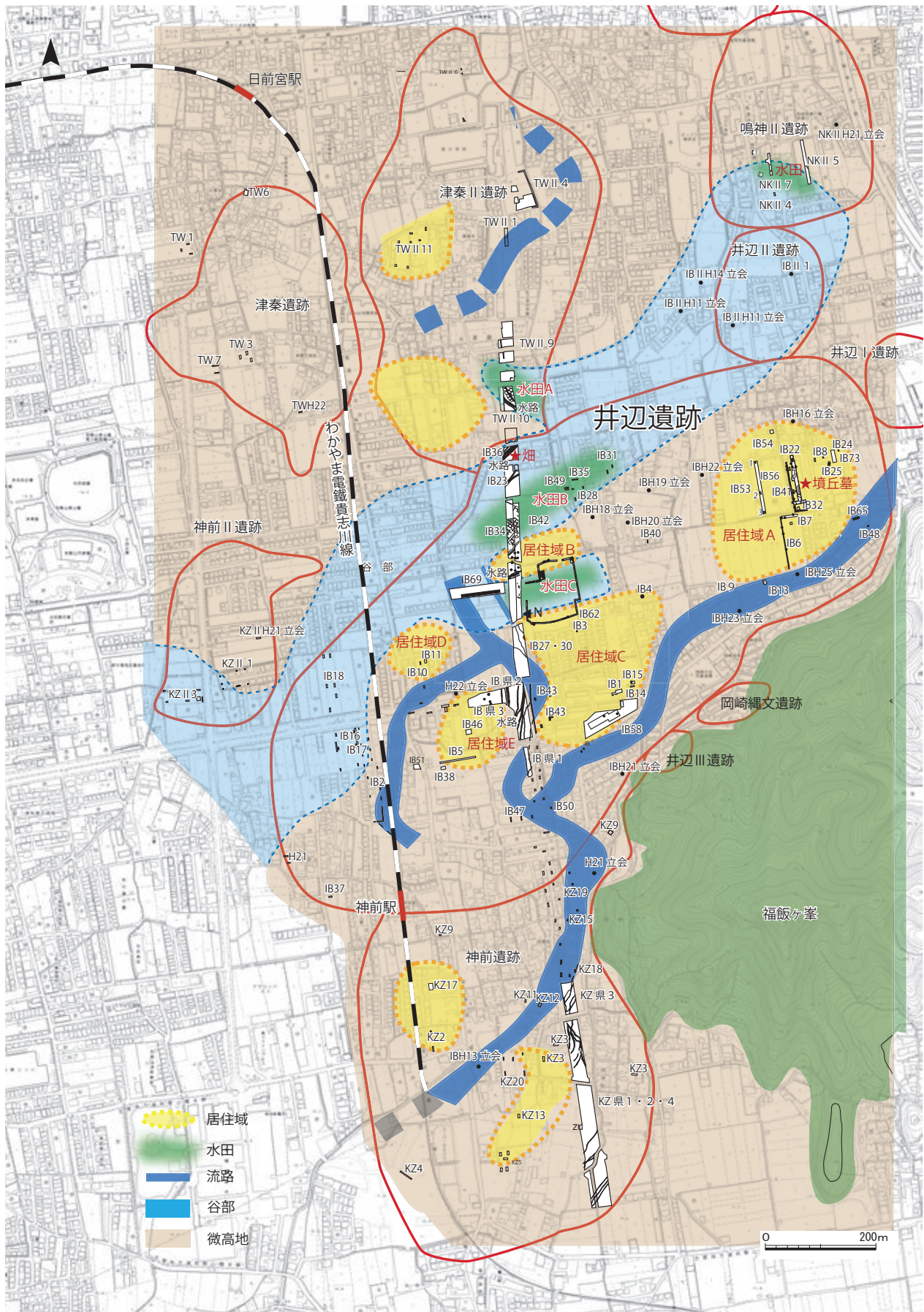


図1 井辺遺跡既往調査と復原された土地利用状況図





図3 井辺遺跡第22・56・73次調査平面図 (1/500)

## ◆ 2. 井辺遺跡の墳丘墓

今回紹介する井辺遺跡の墳丘墓は、遺跡東部で居住域 A と重複してみつかっている。墳丘墓が井辺遺跡で初めて検出された第 22 次調査では、前方後方形 1 基、方形 2 基、第 73 次調査では方形 1 基の墳丘墓が検出されている。これらの墳丘墓の被葬者は居住域 A に統率した有力者であると考えている。方形周溝墓は、弥生時代からの伝統的な墓制であるが、古墳時代になると、前方後方形等の新たな形状、壺形土器の配置、墳丘規模や埋葬施設に弥生時代のものより明確になる階層性等の異なる様相が現れる。発表では、弥生時代の方形周溝墓や古墳とも区別するため墳丘墓と呼称する。

### ① 第 22 次調査の墳丘墓

北から 1～3 号墓とした。いずれも後世の削平により主体部や墳丘盛土は失われている。3 基の周溝埋土はほぼ同じで、5 層に分層できる。2 号墓と 3 号墓は埋土 1 層が削平され、遺存せず、埋土 2～5 層が堆積する。最下層の埋土 5 層対応層は、ブロック土で周溝掘削時の埋め戻し土と考えられ、2 号墓、3 号墓では部分的であったが、1 号墓では、後方部周溝の全体で確認できた。1 号墓と 2 号墓は埋土 3 層の遺物出土量が多く、3 号墓は、埋土 4 層の出土遺物が多かった。いずれも墳丘外から投棄された状態のものが多く、墳丘上からの転落遺物は確認できなかった。これらの遺物は墓前祭祀に用いたと考ええると、各墳丘墓ごとに 2 回以上おこなわれていたと考えられる。

1 号墓は東半分と西側周溝、後方部北西隅を検出した（図 4）。墳形は前方後方形で、全長約 19 m、幅約 12 m、後方部長が 13 m、前方部長が 6 m を測る。周溝は、後方部北側が幅 4.0 m、深さ 0.7 m、東側が幅 2.7 m、深さ 0.8 m で、くびれ部が幅 4.0 m、深さ 0.645 m、前方部東側は北側が 3.0 m、南ほど細くなり、前方部の南東隅で途切れ、周溝は全周しない。周溝を含めた大きさは全長 21.5 m、幅 16 m を測る。前方部南側を断ち割り、断面観察をした結果、溝状の落ち込みを確認したが、周溝埋土とは異なるため、前方部南側には周溝がないと考えている。最終堆積である埋土 1 層からは、須恵器細片 1 点が、埋土 2 層と 3 層からは周溝全体からで壺、甕、高杯、鉢等の土師器片が出土した。特に、埋土 3 層からは棒状の木片や大きな破片の土器が出土した。後方部北側で出土した完形に近い高杯 1 点は形状が東海地方の特徴を持ち、在地の胎土で作られている（第 5 図－1）。埋土 4 層からは完形に近い広口や受口の壺、甕が出土した（第 5 図－2～5）。周溝掘削時の埋戻し土と考えられる 5 層は、出土遺物はなかった。出土遺物の時期から庄内式併行期第 2 段階もしくは 3 段階に築造されたと考えている。前方部では庄内式併行期第 1 段階もしくは 2 段階の遺物を多く包含し、築造以前の遺構が存在するようである。前方部を主軸方向の断ち割ったトレンチ断面では、墳丘下層で紀伊第 V－5～6 様式の土器を包含する複数の竪穴建物を確認した。2 号墓は、西側 1/4 程度を検出した。墳形は不定形な方形をしており、円形の可能性もある。一辺約 12 m の規模を持つ。周溝は、幅 3.0～3.5 m、深さ 0.4～0.55 m で南側より北側が深い。周溝を含む南北長は約 16 m である。埋土 3 層からは庄内式併行期第 4 段階の完形や全体がわかる大きな破片の土器が多数出土した。特に、周溝の北西側では、墳丘外から投棄された状態の土器がまとまって出土した。埋土 4 層からは庄内式併行期第 3 段階の完形に近い鉢、高杯、壺、甕と木鍬が出土した（写真 1）。

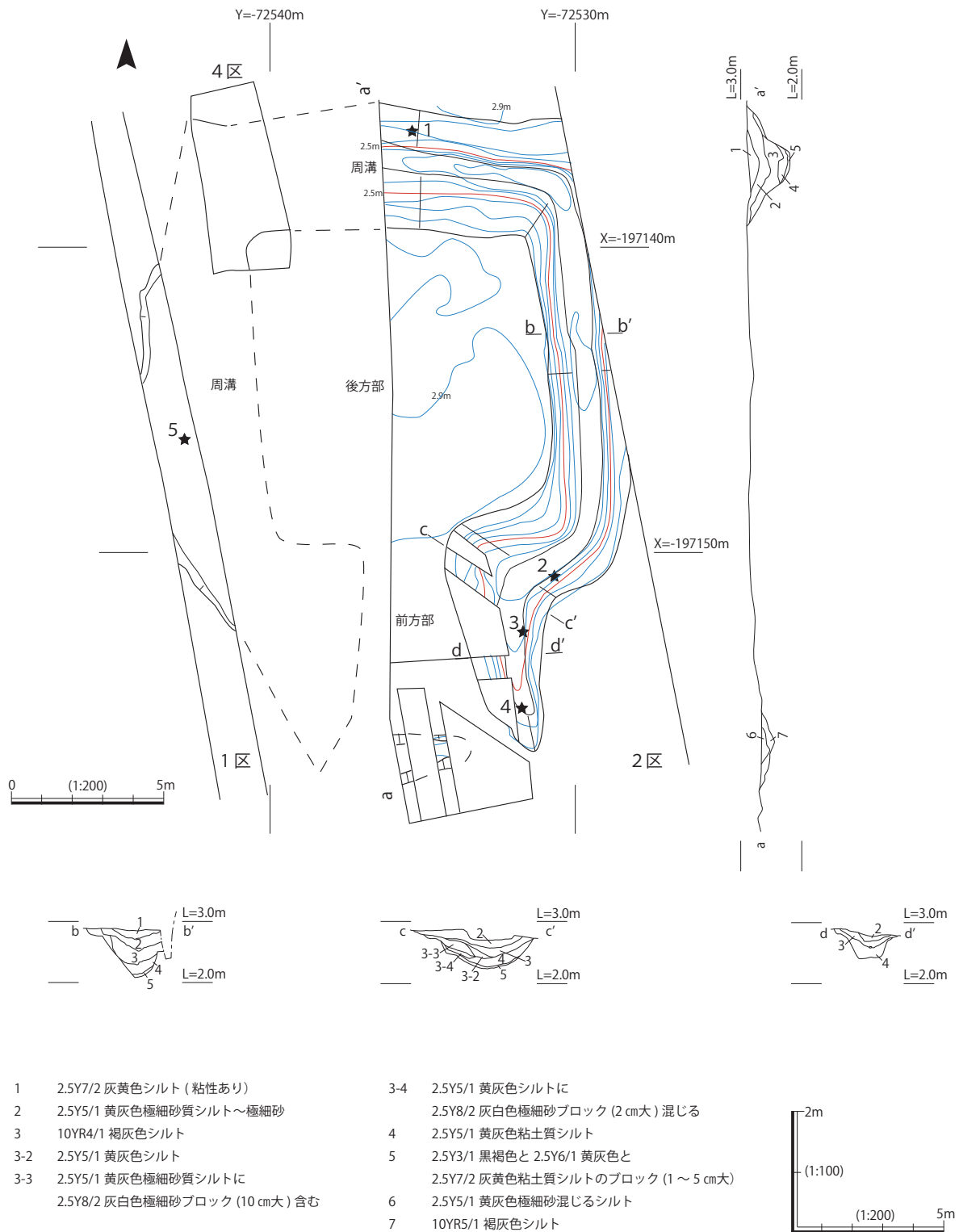


図4 1号墓平面図 (1/200)・断面図 (縦: 1/100・横 1/200)



写真1 2号墓埋土4層土器出土状況（北西から）



写真2 3号墓南周溝埋土4層土器出土状況（南東から）

3号墓は、東側2/3と北側と南側周溝と東側周溝の一部を検出した。一辺約9mの規模を持ち、南東隅に陸橋を有する。周溝は、北東側が幅3.5m、深さ0.4m、南西側が幅6.0m、深さ0.3mで、周溝を含む北東-南西軸は17mを測り、北西-南東軸は14m程度と推定する。東側周溝は南側で南東方向に屈曲する。南東に屈曲した周溝は幅2.5m、深さ0.7mである。

陸橋部の南側は3号墓と周溝を共有する4号墓が存在する可能性がある。埋土3層からは、北東側で土器が十数点まとまって出土した。埋土4層からは、南西側で完形や完形に近い庄内式併行期第3段階の土器が多数出土した(写真2)。いずれも墳丘外から投棄された状態と考える。東側周溝で木鋤1点が出土した。

## ②第73次調査の墳丘墓

墳丘墓(39-SZ)は西側1/2程度を検出した。主体部および墳丘盛土は後世の削平により失われている。墳形は方形で、南北約9.5m前後を測り、東西規模については不明である。周溝を含む南北長が約12.8mである。39-SZは周溝埋土の観察および平面形態から少なくとも1度の改変が行われていると考えられる。新旧ともにほとんど規模は変わらないが、造営当初は周溝西辺がN-4°39'-Eの方位を持つのに対し、周溝を再掘削して墳丘を再整備する段階ではN-3°42'-Wを指向する。

39-SZ古段階の周溝は幅0.7~0.8m、深さ0.45~0.5mを測り、断面形態が「U」字形を呈する。南辺、北辺周溝の調査区東端付近には一部深くなる部分があり、他の部分にも起伏がみられるなど、底部レベルは一定でない。埋土はベースとなっている粗砂(基本層序5層)を主とし、垂角礫状のシルトブロックを多く含むが人為的な埋土ではなく、墳丘からの崩落土と考えられる。最下層から庄内式併行期古段階の土器が出土した。

新段階の周溝は幅1.2~3.1m、深さ0.25m前後を測る浅い皿形を呈する。埋土は下部に墳丘崩落土と考えられる土が若干みられるが、いずれも破砕した遺物とシルトブロックを多量に含む人為的埋土である。新段階と古段階の周溝が方位を違えていることから、古段階の周溝がほぼ埋没した後、再掘削が行われたと考えられる。周溝南西隅付近、新段階の溝最下層墳丘寄りの地点からは、破砕された複合口縁壺一个体やほぼ完形の直口壺が出土した。墳丘から転落したものか、破砕されて墳丘側から投棄されたものかは詳らかでない。これらの遺物は庄内式併行期新段階のものである。

## ③その他の調査

第22次調査区南に位置する第6・7次調査では墳丘墓は検出されていない。第22次と同調査地内の第21次調査では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性のある落ち込みが検出されている。第73次と同調査地内の第24次調査では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性のある落ち込み、竪穴建物もしくは墳丘墓周溝の可能性のある自然流路と報告された遺構が検出されている。

第56次調査では調査区北側を中心に、土坑墓の可能性のある楕円形や不整形な楕円形土坑、周溝の可能性のある溝を検出した。土坑埋土の一部を洗浄したが、歯や人骨は検出できていない。これらの土坑や溝は竪穴建物に後続する庄内式併行期第3段階を中心とする第2~4段階の時期の遺構である。第22次調査でも調査区北側で似た土坑を検出している。



写真3 第73次調査区全景（北から）



写真4 墳丘墓 (39-SZ) 全景（西から）



### 3. まとめ

井辺遺跡の墓域は、墳丘墓が第22次調査に加え、東へ65mに位置する第73次調査でも検出されたことから、直径70～80m以上の広さを持つことが明らかになった。第21次や第24次調査で周溝の可能性のある遺構が検出されており、さらに多くの墳丘墓が存在したと考えている。第22次調査の西50mに位置する第56次調査で検出した竪穴建物に後出し、庄内式併行期第3～4段階の土坑や溝が墓もしくは墓に関連する遺構であると墓域はさらに西に広がる。

第22次調査で検出した墳丘墓と竪穴建物の重複関係はいずれも竪穴建物が古く、墳丘墓が新しい。第73次調査でも同様である。井辺遺跡の居住域Aでは紀伊第V-4もしくはV-5様式から庄内併行期第3段階まで遺物が出土した竪穴建物が検出されている。庄内式併行期第2段階以降、建物が減少する。墳丘墓の築造時期が庄内式併行期第2段階もしくは3段階であることから、集落と墳丘墓は連続し、庄内式併行期第2段階から3段階の間で、居住域から墓域へ変化したものと考えている。すべての遺物を確認していないので、今後見解を改める可能性もあるが、現在のところ、1号墓、2号墓、3号墓の順で築造されたと考えている。墳丘墓(SZ-39)は一番高所に立地していることから、1号墓より先に築造された可能性もあるが、土器ではその関係を明らかにできなかった。

第73次調査の墳丘墓(SZ-39)は築造時の周溝では庄内式併行期古段階、改変後の周溝では新段階の遺物が出土したが、居住域内に墓が築かれたとは考えにくいので、築造時の周溝で出土した古段階の遺物は重複する竪穴建物に帰属した遺物である可能性がある。また、第56次調査では墳丘墓と同時期の遺物が出土する竪穴建物が存在することから、墳丘墓から離れたところでは竪穴建物と墳丘墓が並存した可能性がある。竪穴建物上を横切り、墳丘墓と同時期の溝が検出されていることから、溝で新たな居住域と墓域が区切られていた可能性や居住ではない用途の竪穴建物の可能性も考えられる。1～3号墓の周溝から第4段階の土器がまとまって出土することから、継続して祀られていたと考えるが、第4段階の建物は検出されておらず、居住域は移転した可能性がある。

井辺遺跡の墳丘墓群は弥生時代後期後半の成長した勢力の墓であり、庄内式併行期第2段階から第3段階の短期間に築造され、古墳時代前期には続かない。前方後方形という新しい墳形が採用され、前方後方形墳丘墓の被葬者が中核をなす存在であったと考えられるが、周溝を含む規模は他の方形墳丘墓と比べて突出して大きくない。川辺遺跡の墳丘墓を始め、古墳時代前期に見られる底部穿孔した壺形土器は井辺遺跡では出土していない。また、井辺遺跡の墓域では現在まで土器棺が検出されていないことも井辺遺跡の特徴かもしれない。

#### 【参考文献】

和歌山市教育委員会 2014「井辺遺跡第21次調査」・「井辺遺跡第24次調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成24年度—』

(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 2015「6.井辺遺跡第22次調査」・「8.井辺遺跡第25次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報—平成24年度(2012年度)—』

(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 2020『井辺遺跡第56次発掘調査報告書』

第73次調査の成果は『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報—平成31(令和元)年度(2019年度)—』に掲載予定

# 和歌山市秋月 1 号墳等の発掘調査

和歌山県教育委員会 黒石 哲夫

## ◆ I 秋月遺跡（秋月 1～6 号墳）の調査（和歌山県第 2 次調査 1985 年度）

### 秋月 1 号墳の概要

- 標 高 現地表面 4.2m 古墳検出面 3.4m  
規 模 墳丘長 26.8m、後円部径 15.5m、前方部長 11.3m、全長 32.0m  
特 徴 前方部南西端に陸橋部、後円部の周溝が前方部より幅広く深い  
後円部からクビレ部にテラス状削り出し 墳丘約 1/2・埋葬主体削平  
築造時期 古墳時代前期（布留式古段階）  
出土遺物 小型丸底壺・複合口縁壺・二重口縁壺・直口壺・ミニチュア壺・小型器台・高  
坏・S 字状口縁台付甕（東海系）・土玉 2・ガラス製管玉・小玉

### 秋月 2～6 号墳の概要

- 秋月 2 号墳 方墳（一辺約 10m）、周溝、直口壺・ミニチュア土器 古墳時代前期  
秋月 3 号墳 方墳（規模不明）、周溝、複合口縁壺 古墳時代前期  
秋月 4 号墳 方墳（規模不明）、周溝、直口壺・高坏・小型器台 古墳時代前期  
秋月 5 号墳 方墳（一辺約 10m）、周溝、須恵器甕・甗 古墳時代中期  
秋月 6 号墳 方墳（規模不明）、周溝、須恵器甕・甗 古墳時代中期

## ◆ II 秋月 7～8 号墳の調査（和歌山県第 5・6 次調査 1992～1993 年度）

- 秋月 7 号墳 方墳（一辺約 10m）、周溝、土師器甕・高坏、須恵器甕・甗 古墳時代中期  
秋月 8 号墳 方墳（一辺約 10m）、周溝、張出、土師器鉢、須恵器甕・甗 古墳時代中期

## ◆ III 秋月 9～12 号墳の調査（和歌山県第 9 次調査 2009 年度）

- 秋月 9 号墳 円墳（直径約 14m）、周溝、土師器・須恵器 古墳時代後期  
秋月 10 号墳 円墳（直径約 12m）、周溝、土師器・須恵器 古墳時代中期  
秋月 11 号墳 円墳（直径約 10m）、周溝、土師器・須恵器 古墳時代中期  
秋月 12 号墳 方墳（一辺約 12m）、周溝、広口壺・二重口縁壺 古墳時代前期

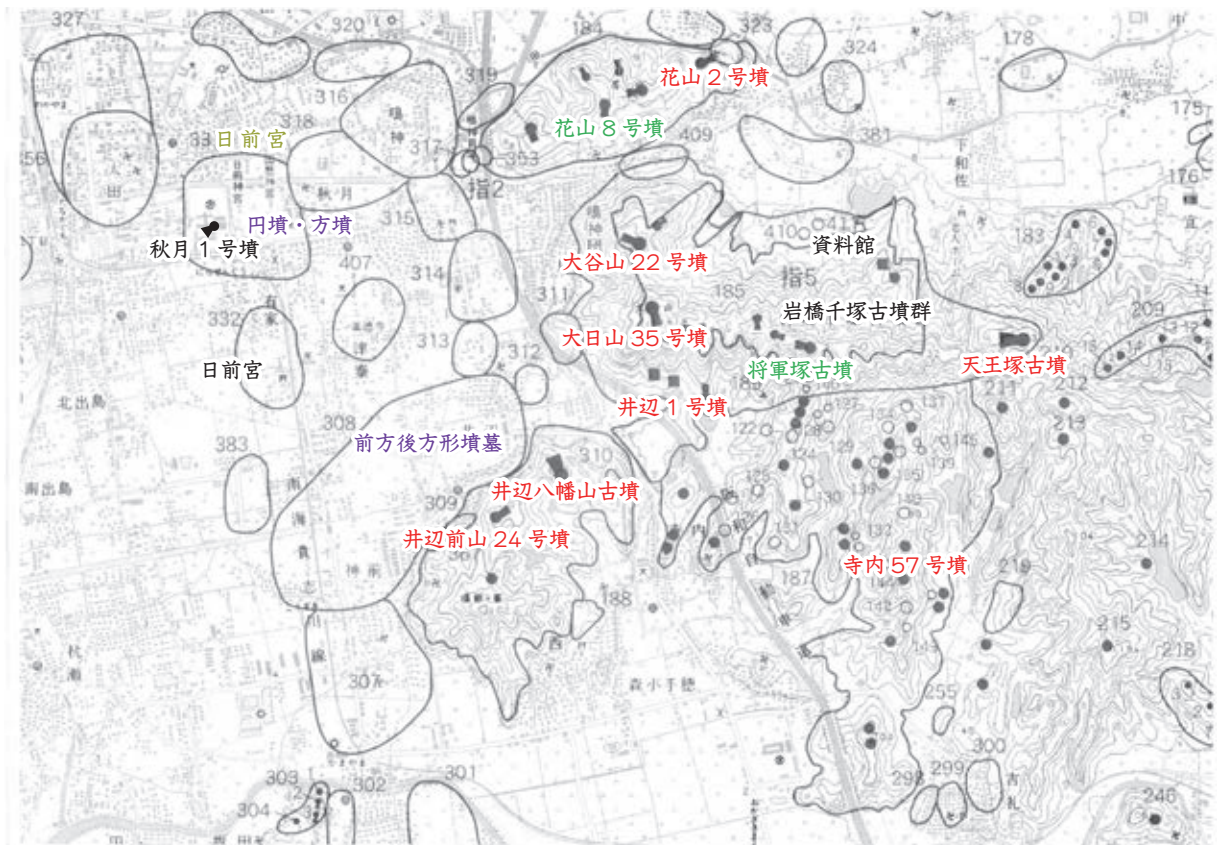
### 【古墳・遺構の年代】

- 弥生時代末 集落 井戸 3 基・土坑・溝  
古墳時代前期 墓域 前方後円墳 1 基（1 号墳）・方墳 4 基（2～4 号・12 号墳）  
古墳時代中期 墓域 円墳 2 基（10・11 号墳）・方墳 4 基（5～8 号墳）  
甕棺墓 1 基（SX5）・土坑墓 1 基（SK142）  
古墳時代後期 墓域 円墳 1 基（9 号墳）

※和歌山市による日進中学校周辺での調査で、古墳時代前期～後期の竪穴住居が多数発見されており、秋月遺跡の西側が主として墓域で、東側は居住区域だと推定される。



秋月1号墳航空写真（西から）



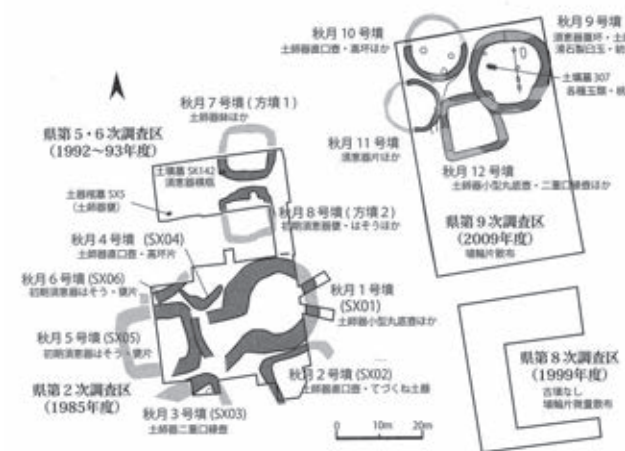
岩橋千塚古墳群分布図（上が北）



秋月遺跡調査地点図



秋月1号墳航空写真(北から)



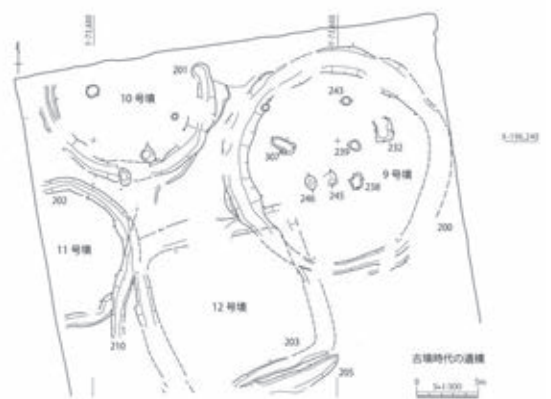
秋月1号～12号墳分布図



秋月9～12号墳(西から)

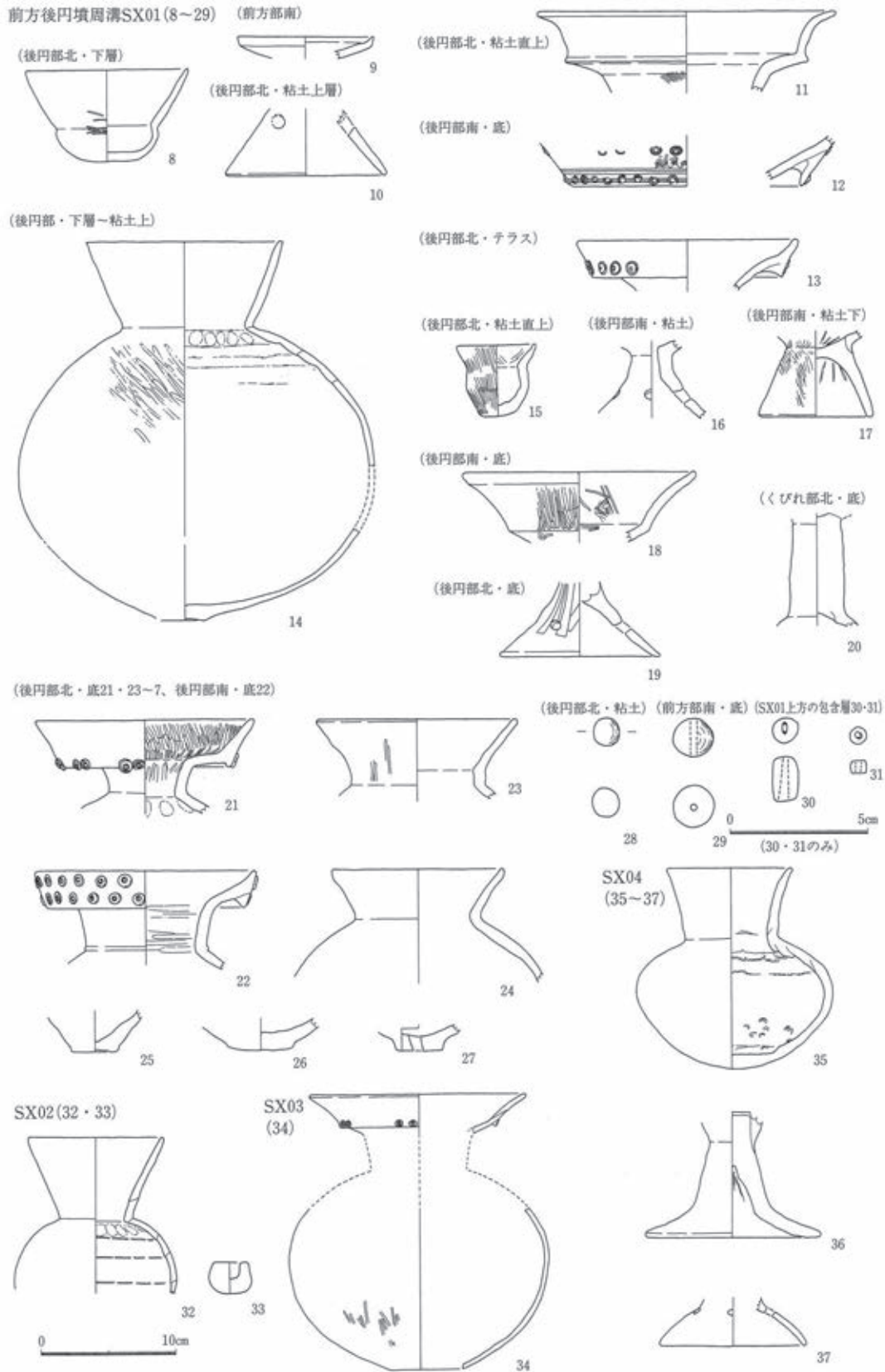


秋月1～6号墳墳丘図



秋月9～12号墳墳丘図

秋月1号墳出土遺物



秋月2号墳出土遺物

秋月3号墳出土遺物

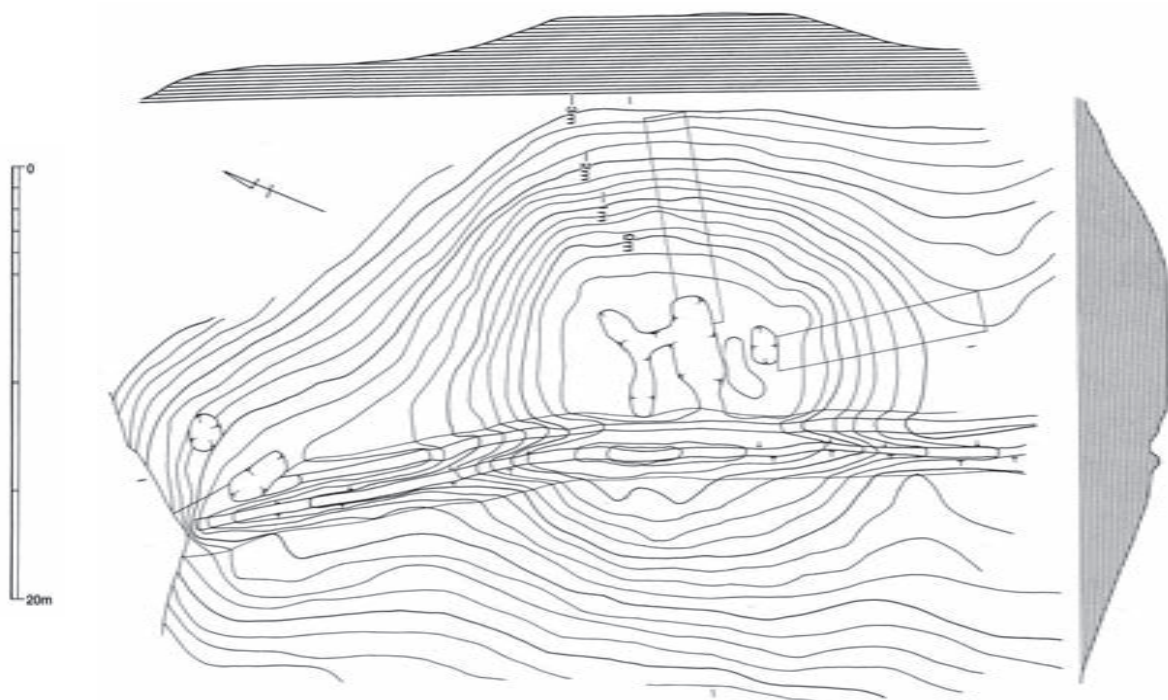
秋月4号墳出土遺物

秋月1号～4号墳出土遺物

## 花山 36 号墳・井辺前山 24 号墳の調査

### ◆ 花山 36 号墳の概要 1995 年度調査 (岩橋千塚古墳群緊急確認調査 和歌山県教育委員会)

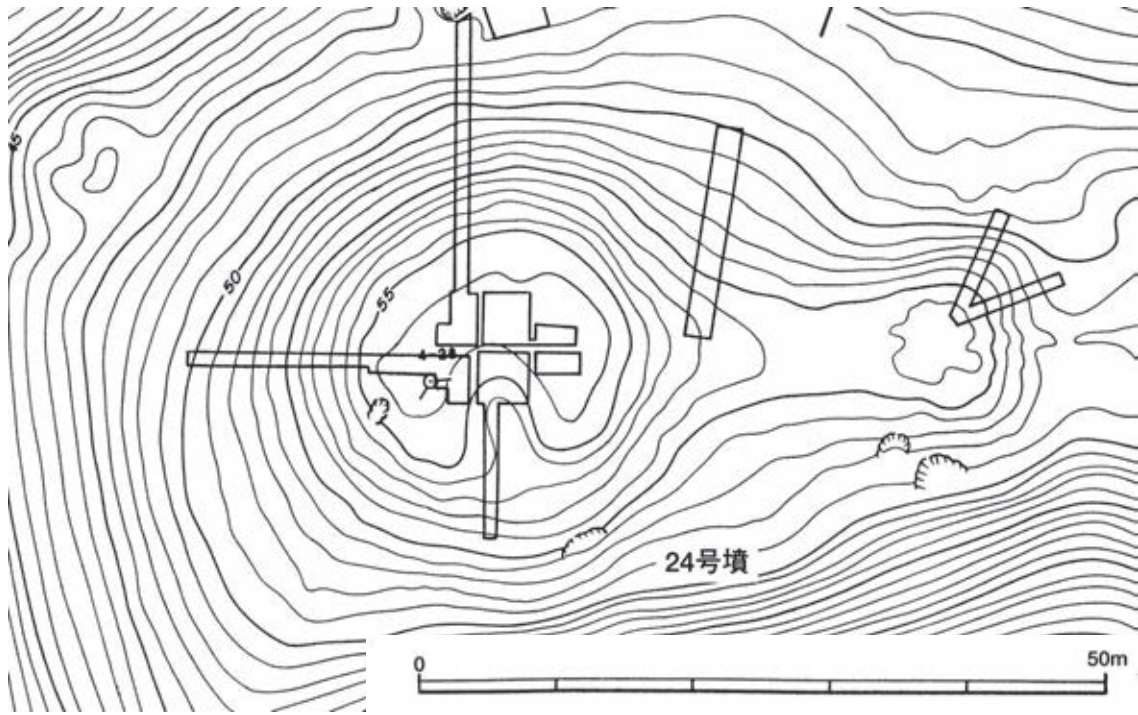
標高	花山丘陵上 約 60m
規模	墳丘長約 42.0m、後円部径 25.0m、高さ約 4.5m 前方部長約 17.0m (推計値)
特徴	柄鏡形の前方後円墳。後円部の東側とクビレ部は、直線的で、後円部と前方部の主軸がずれている。土塁と道で、墳丘主軸西半側損壊 前方部端崖面後円部墳丘約 1/3 削平 埋葬主体破壊 竪穴式石室か礫槨 埴輪なし
築造時期	古墳時代中期
出土遺物	弥生時代末～庄内期の甕・壺の破片、円筒埴輪破片 (墳丘盛土から)



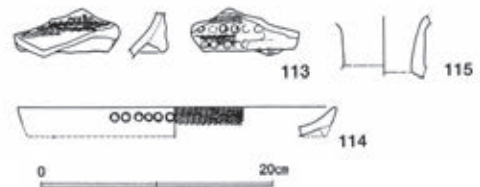
花山 36 号墳墳丘図

### ◆ 井辺前山 24 号墳の概要 1997 年度調査 (和歌山県教育委員会)

標高	福飯ヶ峯丘陵上 約 55m
規模	墳丘長約 60.0m、後円部径 38.0m、高さ約 6.0m 前方部長約 22.0m
特徴	前方部のやや発達した柄鏡形の前方後円墳。後円部 2 段築成。後円部墳丘約 1/4 削平・埋葬主体破壊 粘土槨単体 埴輪なし
築造時期	古墳時代前期か中期
出土遺物	庄内期の二重口縁壺・直口壺の破片 (墓壙周辺から)、庄内期の甕破片 (墳丘盛土から)



井辺前山 24 号墳墳丘図



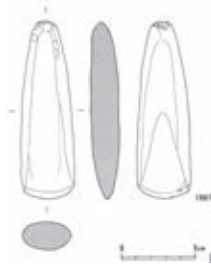
井辺前山 24 号墳出土遺物

和歌山市川辺遺跡の弥生時代中期（Ⅳ様式期）の方形周溝墓の調査

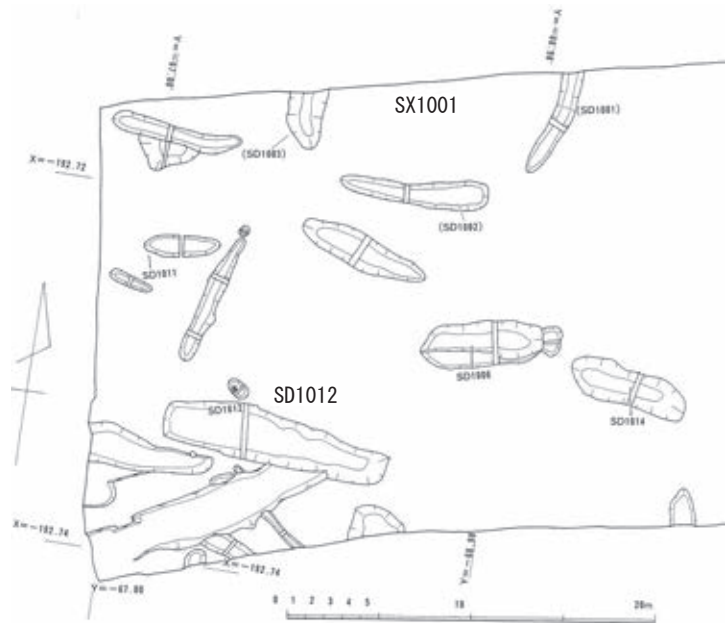
❖ 方形周溝墓（SX1001）・SD1012 の概要《Ⅷ区・1992 年度》

方形周溝墓（SX1001） 標高 11.8m の沖積地 方形（一辺約 12m）、周溝、四隅途切れる弥生時代中期（Ⅳ様式期）？

SD1012 長さ約 12m 周溝？ 直口壺（穿孔あり）、磨製石斧弥生時代中期（Ⅳ様式期）



SD1012 出土遺物

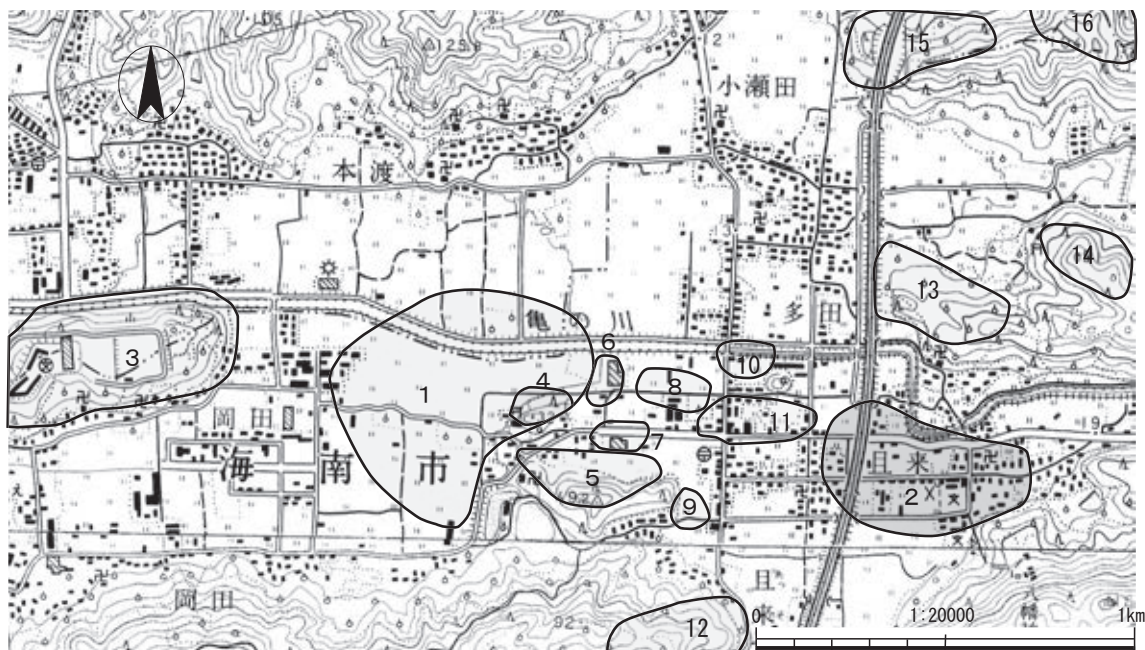


# 海南市亀川遺跡の発掘調査

海南市教育委員会 矢倉 嘉人

## ◆ 1. 亀川遺跡の位置と環境

亀川遺跡は亀の川により形成された沖積平野に位置する。この平野部で人々の生活が始まるのは、縄文時代後期からで、弥生時代になると岡村遺跡や亀川遺跡において集落が展開する。岡村遺跡では前期の土器を伴う溝が検出され、亀川遺跡からも前期の土器が出土している。中期になると亀の川流域の遺跡の規模は拡大する。岡村遺跡では集落に伴う中期の溝が多数確認されており、環濠の可能性が指摘されている。亀川遺跡では竪穴住居や方形周溝墓が見つかった。中期まで発展してきたこれらの両遺跡は、中期の後半から後期の初めにかけての土器の出土は少なくなるが、後期後半以降、再び集落の活動が活発になる。古墳時代になっても亀川遺跡、岡村遺跡では引き続き集落が継続される。また、亀の川流域周辺でも多くの古墳が築かれる。山崎山5号墳は前方後円墳で銅剣、鉄剣などが出土している。後期になると室山古墳群、岡村古墳群など多くの古墳群が築かれる。



- |             |             |              |              |
|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 岡村遺跡     | 2. 亀川遺跡     | 3. 山崎山古墳群    | 4. 岡村八幡神社古墳群 |
| 5. 岡村古墳群    | 6. 且来Ⅰ遺跡    | 7. 且来Ⅱ遺跡     | 8. 且来Ⅲ遺跡     |
| 9. 且来Ⅳ遺跡    | 10. 且来Ⅴ遺跡   | 11. 且来Ⅵ遺跡    | 12. 且来下垣内古墳群 |
| 13. 多田北山古墳群 | 14. 国主神社古墳群 | 15. 薬勝寺南山古墳群 | 16. 滝ヶ峰遺跡    |

図1 周辺遺跡分布図

## ◆ 2. 亀川遺跡既往の調査

亀川遺跡の1次調査は昭和52年に亀川小学校体育館建設に伴い実施され、弥生時代後期と古墳時代前期の竪穴建物が検出されたほか弥生土器が出土している。2次調査は同じく昭和



52年に亀川幼稚園建設に伴い実施され、弥生時代中期の竪穴建物、周溝墓3基などと共に多量の弥生時代の遺物が出土した。第3次調査及び4次調査では遺構は確認できなかったが、弥生時代中期～後期の土器が多量に出土した。第5次調査は昭和59年に亀川幼稚園増築に伴い調査が行われ、弥生時代の竪穴住居5棟、弥生時代中期から後期頃の方形周溝墓が検出されている。6次調査は弥生時代の竪穴建物3基が検出されている。続く7次調査では、古墳時代の竪穴住居や溝、8次調査では、弥生時代の溝などが検出されている。また、9次調査では弥生時代の竪穴住居1棟などが検出され、10次調査として古墳時代の竪穴住居が検出されている。

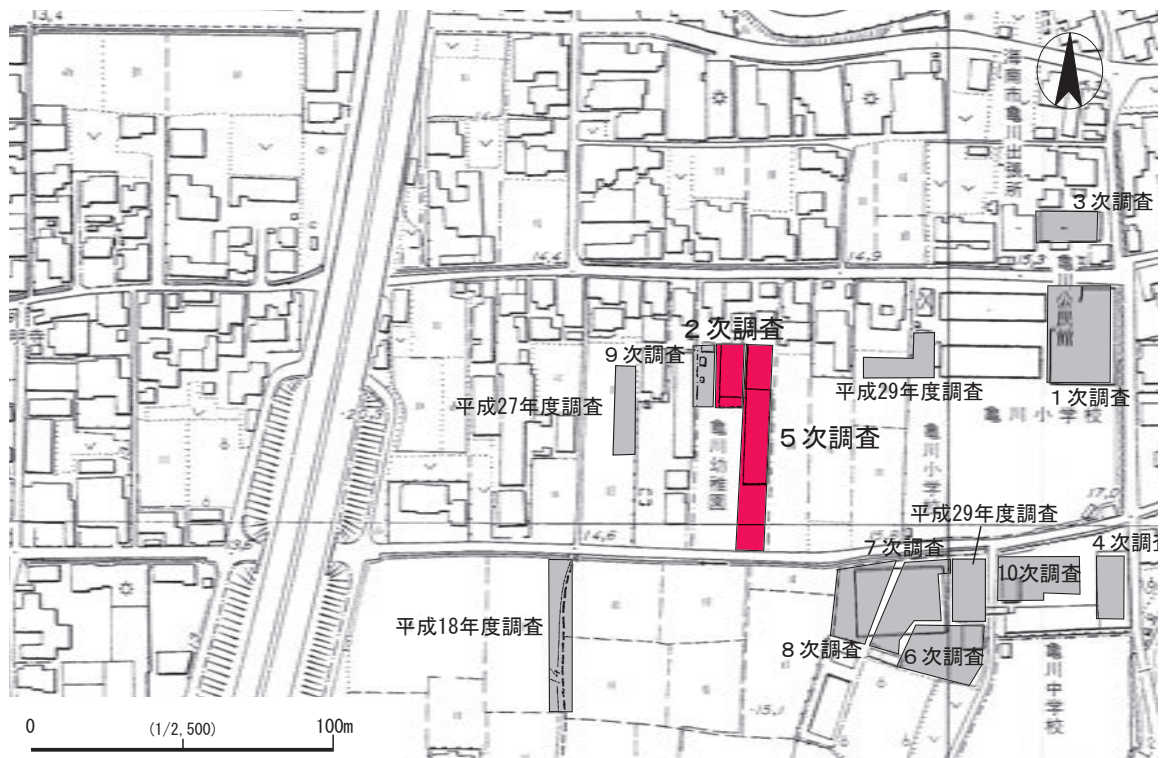


図2 既往調査位置図

### ◆ 3. 亀川遺跡の周溝墓

亀川遺跡では昭和52年の2次調査及び、昭和59年の5次調査において検出されている。次にこれらの周溝墓について紹介する。

#### ▶ 2次調査 ◀

##### 1号土壙墓

調査地北東で検出した土壙墓で、平面形は長方形を呈し、長さ約2.44 m、幅約0.9 m、深さ約0.28 mを測る。内部の立ち上がりに丸味を持ち、舟底状を呈する。主軸はN-46°-Eで、南西隅より磨製石斧が出土している。

##### 2号土壙墓

1号土壙墓の北西約3.2 mに位置する。平面形は長方形を呈し、長さ約2.62 m、幅約1.0 m、深さ約0.27 mを測る。主軸にそって左右に肩状の段がみられる。段の深さは上面より約0.15 mである。主軸はN-61°-Eを指す。

### 3号土壙墓

1号土壙墓の南西約3.7mに位置する。検出した3基の土壙墓のうちで一番大きく、平面形は長方形を呈し、長さ約3.18m、幅約0.84m、深さ約0.24mを測る。内部の立ち上がりは垂直に近い。主軸はE-23°-Sで、北西隅から鉄製釣針が出土している。

### 周溝

3基の土壙墓を取りまくように検出したが、調査区外へ続き、方形周溝への広がりには確認できなかった。しかし、検出された状態からみれば不規則な方形周溝に発展する可能性がある。周溝はいずれも3基の土壙墓に共有部分がみとめられる。溝の幅は約0.8m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測る。土壙墓周辺から多数の小ピットが検出されている。

遺構内からの遺物の出土量が非常に少なかったが、土壙墓は弥生時代中期、1号住居は弥生時代中期から後期初頭の頃に比定できる。

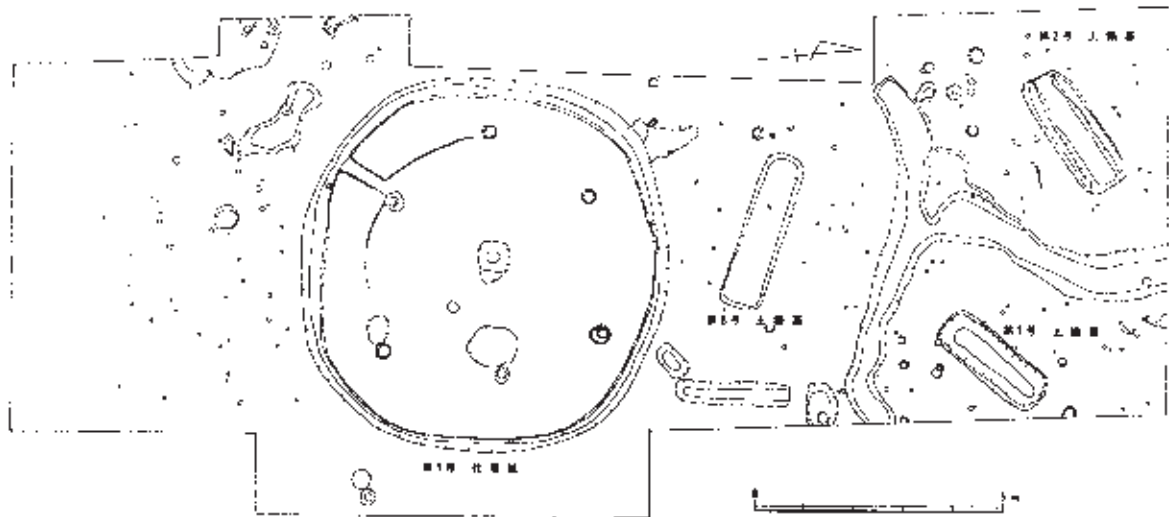


図3 2次調査遺構平面図

### ▶ 5次調査 ◀

#### 方形周溝墓 SK-04

方形周溝墓の東溝のみ検出。主体部は削平を受けており破壊されていた。検出した東溝は長さ5.2m、幅0.48m、深さ0.12m。溝内より弥生時代後期の壺・甕・鉢などが出土している。

#### 方形周溝墓 SK-05

東西4.4m、南北5.0mの方形周溝墓。溝は東・北・西と連続するが、2ヶ所の陸橋部をもって南溝とつながっている。溝の幅は約0.3m～0.48mで深さは平均0.065mと浅い。

主体部は1基でほぼ中央部に位置し、主軸の方向はN-4°-Eである。東西幅0.96m、南北長2.32m、深さ0.065mであった。周溝内北側にのみ対象位置に柱穴が2個並んでいるが性格は不明である。

## 土壇墓 SK-06・土壇墓 SK-07

方形周溝墓 SK-05 の南西部を掘り込んで築かれた土壇墓で、SK-06 は長さ 1.92 m、幅は中央部で 0.66 m、深さは 0.213 m であった。主軸の方向は N-26°-W で、弥生時代中期末の土器が出土している。

SK-07 は、SK-06 の南東に並ぶように築かれている。長さ 1.88 m、幅は中央部で 0.59 m、深さ 0.231 m であった。主軸の方向は N-49°-W で、遺物は弥生時代中期末の土器が出土している。SK-06・SK-07 とともに内部堆積土より骨片が出土している。

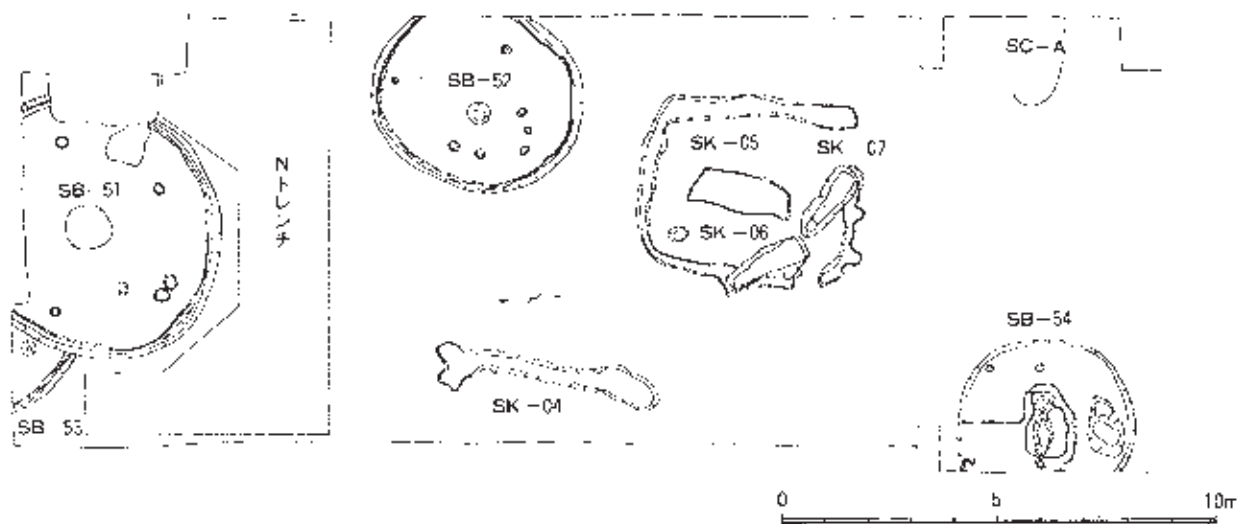


図4 5次調査平面図



写真1 2次調査



写真2 5次調査

### ◆ 4. まとめ

亀川遺跡では、これまで方形周溝墓 1 基、周溝墓 3 基を検出している。しかし、5 次調査で検出した方形周溝墓のように 1 基 1 墓で独立した周溝を持つ SK-05 と、2 次調査で検出した周溝を共有する周溝墓について、その関連について明らかでない。両周溝墓の構築年代は接近しており、構造の違いは何によるものか今後の調査成果による検証が必要である。

# 美浜町・吉原遺跡の墓域

(公財)和歌山県文化財センター 田之上 裕子

## ◆ 1. はじめに

吉原遺跡は、紀伊半島の中部、日高郡美浜町吉原に位置し、太平洋をのぞむ煙樹ヶ浜海岸砂丘上に所在する。

これまでの発掘調査によって弥生時代中期～古墳時代、平安時代、中世～近世の墓域が展開されていることが知られている。

県道柏・御坊線改良工事に伴って実施された昭和62・63年度の第1・2次調査<sup>註1</sup>では弥生時代中期から庄内併行期の方形周溝墓や墓壇が、本遺跡の西側で実施した平成28年度調査<sup>註2</sup>では中世～近世の火葬墓が確認されている。

令和2年7～9月に、新浜集会場新築工事に伴う発掘調査を第1次調査地の南接地で実施した。弥生土器鉢、墓壇などの埋葬施設は確認できなかったが、須恵器壘・高杯の埋納土坑各1基ずつを検出し、各時代の墓域の広がりを考える上で、貴重な調査成果を得た。

ここでは、本遺跡の弥生時代中期から庄内併行期の各埋葬施設を紹介する。



写真1 吉原遺跡と煙樹ヶ浜（北から）



【美浜町】10. 吉原遺跡 7. 和田古墳群 8. 和田1遺跡 9. 和田川遺跡 12. 松原塚塚 13. 堂の前西沼遺跡 14. 吉原御坊跡 15. 田井遺跡 16. 西川遺跡 指4. 松原王子神社の社麓 【御坊市】28. 聖田遺跡 40. 善明寺塚跡 41. 小竹塚古墳 指1. 日高別院の公孫樹

図1 周辺遺跡分布図（「吉原遺跡—都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書」を一部改変）

## ◆ 2. 方形周溝墓（弥生時代中期～古墳時代初頭（庄内併行期））

方形周溝墓は昭和 63 年度第 7 区のみで検出し、いずれも明確な埋葬主体部は確認できなかった。第 7 区で検出した溝状遺構 13 条のうち、5 条は方形周溝墓の周溝部と考えられる。

**SX-001** 第 7 区東端に位置する。SD-007 を周溝部とし、南辺と南西・南東隅を確認した。遺構の大半が調査区外であるため、全容は不明である。東西の規模は 18.5 m 以上、周溝部の幅は 5.15 m、深さは 0.75 m を測る。周溝部南東隅で弥生時代中期前葉の完形の弥生土器壺が横転した状態で出土した。

**SX-002** 第 7 区東部に位置する。SD-008 を周溝部とし、北西辺に陸橋部がある。最大規模は 12.5 m 以上で、周溝部の幅は 1.9 m、深さは 0.43 m を測る。内陸部に土壇 4 基を認めるが、この周溝部に伴うものかは明らかでなく、時期も不明である。

**SX-003** 第 7 区東部に位置し、SD-012 と SD-013 を周溝部とする。北東辺中央に幅 0.91 m の陸橋部をもつ。最大規模約 8.0 m、周溝部幅 1.4 ～ 1.64 m、深さ 0.35 m を測る。SD-012 南西辺中央部付近で庄内併行期の小型甕が、SD-013 内で庄内併行期の小型鉢が、SD-012 屈曲部で弥生時代中期の壺が出土した。

**SX-004** 第 7 区西部に位置する。SD-019 を周溝部とし、弥生時代後期～最終末にかけての遺物が多く出土したことから弥生時代後期末と思われる。

## ◆ 3. 土壇墓（弥生時代中期）

**SK-012** 第 3 区中央に位置する。長軸 0.6 m 以上、短軸 0.55 m 以上、深さ 0.5 m、軸方位は N 75 E を測る。弥生時代中期中葉の壺が出土した。

**SK-018** 第 3 区やや北寄りに位置する。長軸 1.1 m 以上、短軸 1.3 m、深さ 0.33 m、軸方位は N 80 E を測る。体部下半部に穿孔を施した弥生時代中期中葉の壺 2 個体が底部の中央と西端に横転した状態で置かれていた。

**SK-028** 第 4 区やや中央に位置する。長軸 1.66 m、短軸 1.3 m、深さ 0.18 m、軸方位は N 76 W を測る。底部中央で横転した状態で弥生時代中期中葉の壺が出土した。

**SK-055** 第 5 区西端に位置する。長軸 1.93 m、短軸 1.56 m、深さ 0.44 m、軸方位は N 66 W、平面形が楕円形を呈する。底部北西部では弥生時代中期中葉の甕が出土した。

**SK-069** 第 7 区東部に位置する。長軸 1.02 m 以上、短軸 0.62 m、深さ 0.2 m、軸方位は N 05 W、平面形は楕円形である。埋土上層で粉碎された弥生時代中期中葉の甕が出土した。

**SK-032 大型墓壇** 第 4 区西部に位置する。長軸 3.76 m、短軸 2.26 m、深さ 0.44 m、軸方位は N 56 W を測り、平面形は隅丸菱形を呈する。埋土中に粉碎された弥生時代中期の壺片が広がっていた。壺体下半に穿孔を施す。

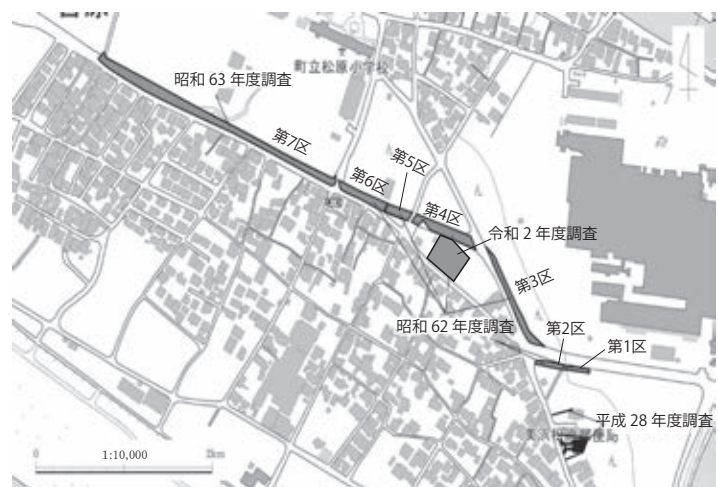


図 2 既往の調査位置図  
（「吉原遺跡—都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書」を一部改変）

#### ◆ 4. 土壙墓（古墳時代初頭（庄内併行期））

SK-094 第7区中央に位置する。長軸 1.75 m以上、短軸 1.03 m以上、深さ 0.35 mを測り、調査区外に及ぶため全容軸と方位は不明だが、埋土から庄内併行期の壺片が出土した。

SK-112 第7区中央に位置する。長軸 1.92 m、短軸 1.46 m、深さ 0.32 m、軸方位はN 51 Eを測り、平面形が楕円形を呈する。庄内併行期の壺が出土した。

SK-133 第7区西部に位置する。長軸 1.87 m、短軸 1.5 m以上、深さ 0.32 m、軸方位はN 63 Wを測る。平面形が楕円形を呈し、底部よりやや高い位置で庄内併行期の甕片が出土した。

SK-091 大型墓壙 第7区中央に位置する。長軸 3.05 m、短軸 2.42 m、深さ 0.49 m、軸方位はN 13 Wを測る。平面形が幅広の隅丸方形を呈する大型の墓壙である。庄内併行期の土器片と釘片が出土している。

SK-107 大型墓壙 第7区中央に位置する。長軸 1.1 m以上、短軸 1.26 m、深さ 0.147 m、軸方位はN 23 Eを測る。底部東側で庄内併行期の壺が横転した状態で出土した。

#### ◆ 5. まとめ

吉原遺跡は、日高平野をひかえた海岸砂丘上に位置する。墓域は砂丘の稜線よりやや後背側に面して、東西方向にのびる稜線に対して帯状に並行している。弥生時代中期～古墳時代、平安時代、中世～近世と継続的に利用されてきたと考えられる。

昭和 62・63 年度の第 1・2 次調査における墓域は、弥生時代中期に係る遺構がほぼ全域で見られるが、より古い時期のものは調査区東半に偏っている。弥生時代後期から古墳時代初頭（庄内併行期）にかけての遺構は第 4 区西端から第 7 区に限定される。被葬者の属する集落立地の変遷によるものか、時期により墓域の変化がみられる。

昭和 63 年度の第 2 次調査の SX-001 方形周溝墓は、遺構の全体は不明だが、周溝部から弥生時代中期前葉の土器が出土していることから、和歌山県内の最古級のものと考えられる。県下の方形周溝墓の出現は、弥生時代中期後葉とする説もあるが、本遺跡ではそれを遡る方形周溝墓 2 基が確認されている。

土壙墓の平面形は、基本的に楕円形で、長方形、円形を呈するものもある。長軸方向の断面は舟底状を呈するものが多い。その規模は長軸の全長 1～2 mのものが多いが、全長 3.2 m以上を測る大型墓壙 4 基も確認されている。SK-069 と SK-032 大型墓壙は、規模の違いのみで墓壙埋土中に粉碎した土器片が混入している事実はかわらない。大型の墓壙が特別な意味をもつものかどうかは明らかになっていない。

墓壙内に供献・副葬された土器は、弥生時代から古墳時代初頭（庄内併行期）にかけては壺・甕であり、墓壙の壁際に置かれることが多い。SK-018 土壙墓のように 2 個体が墓壙内に置かれることもあるが、多くは土器 1 個体を供献の基本としている。

#### 調査報告書

註 1 「吉原遺跡―県道柏・御坊線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」財団法人和歌山県文化財センター 1990 年 3 月

註 2 「吉原遺跡―都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書」公益財団法人和歌山県文化財センター 2017 年 2 月

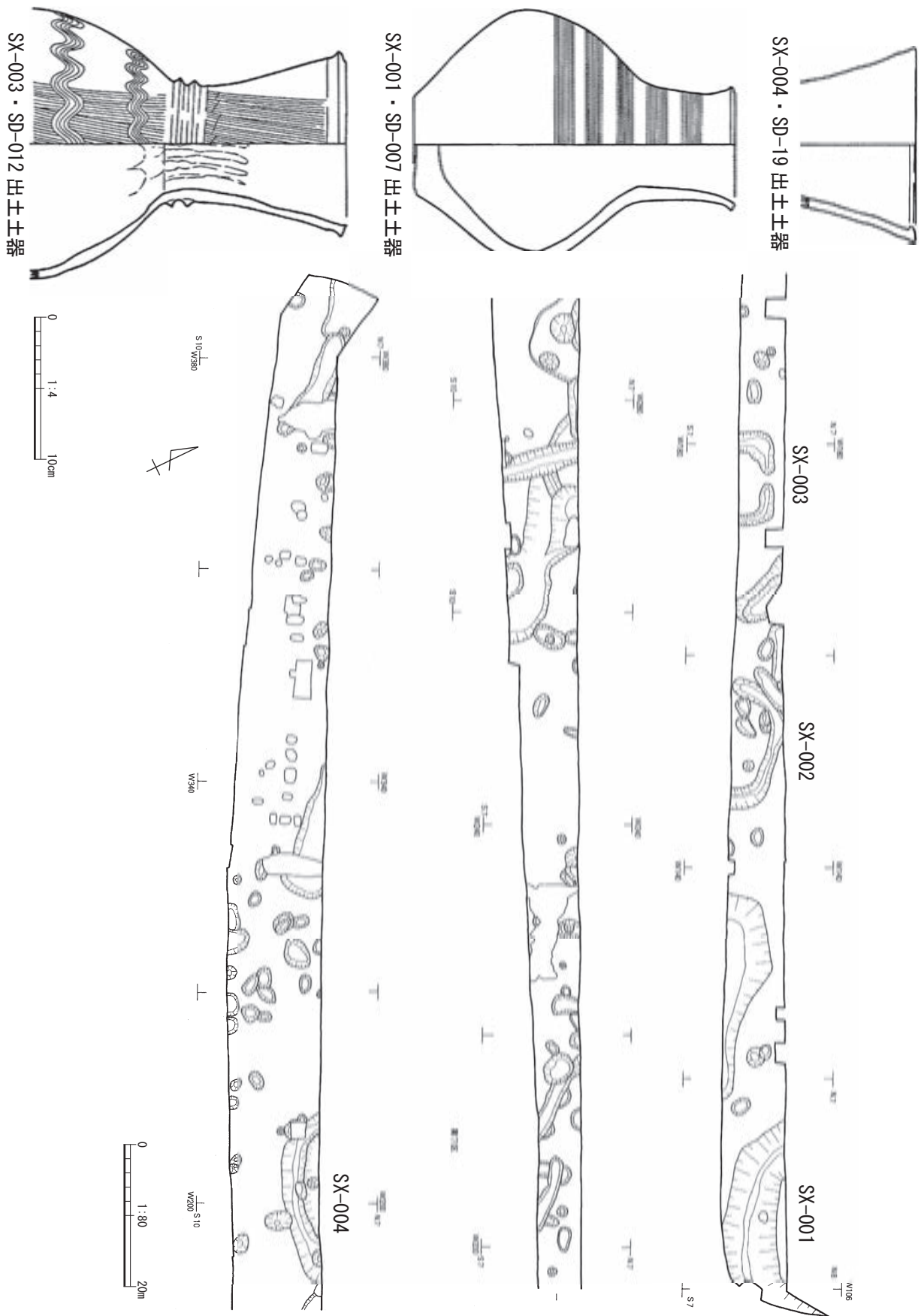


図3 吉原遺跡昭和63年度調査第7区 遺構平面図 (S=1/500) と土器実測図 (S=1/4)

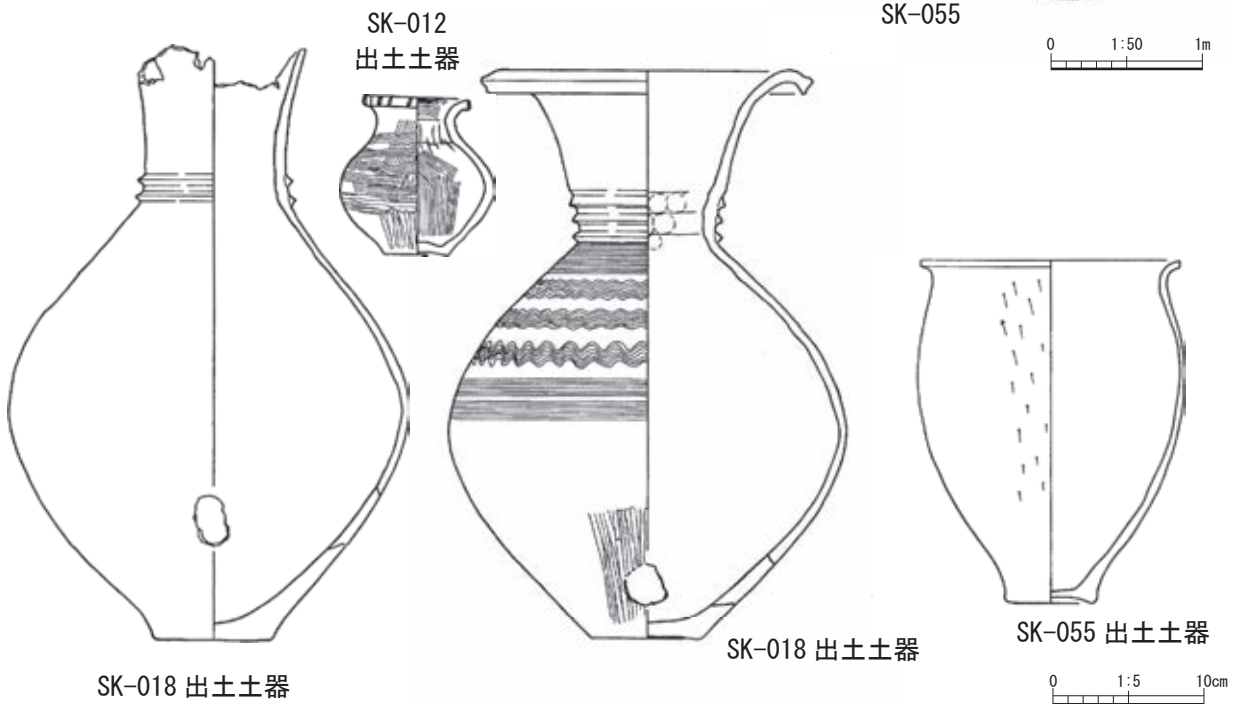
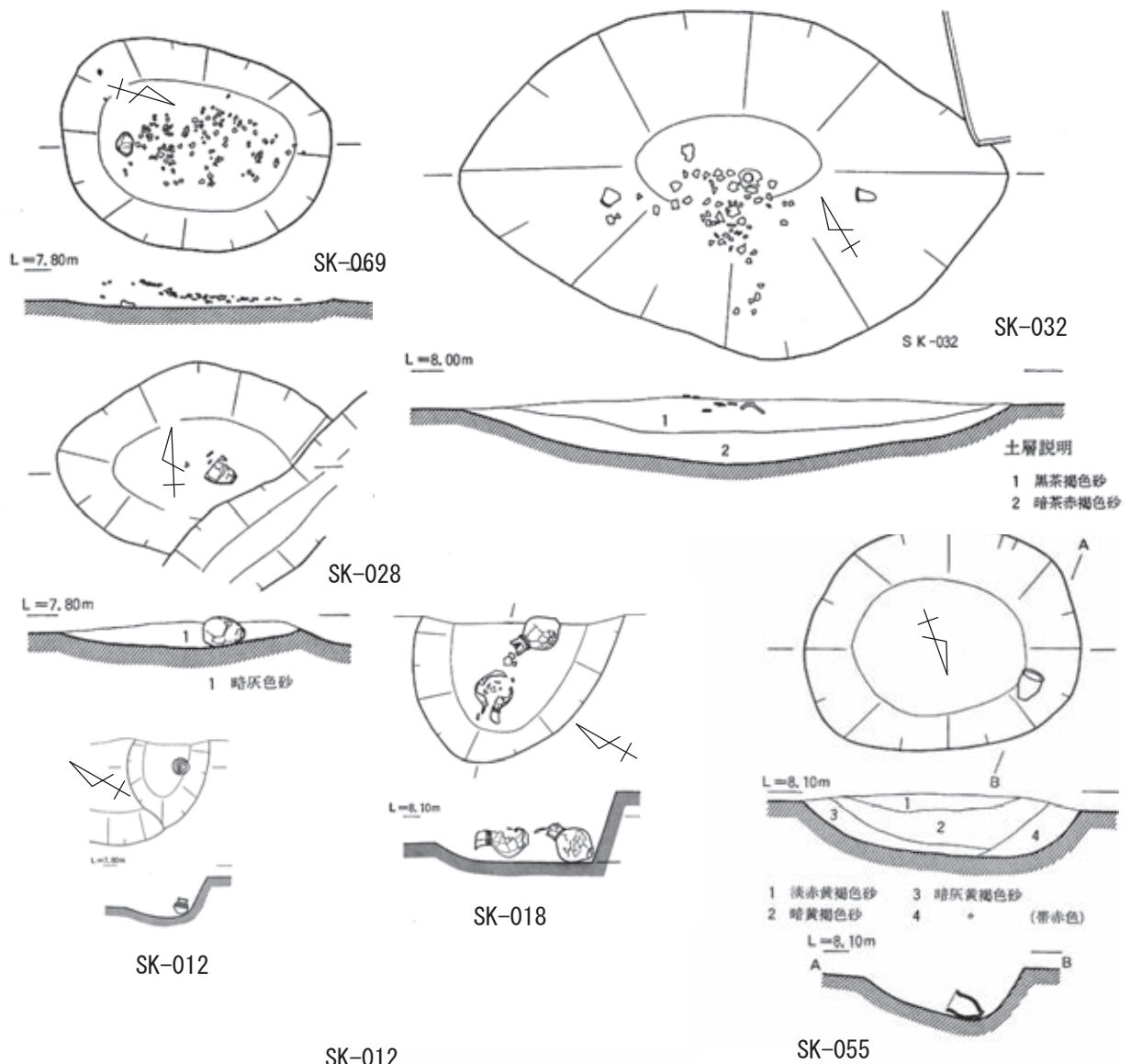


図4 吉原遺跡昭和63年度調査 土壌墓遺構図と土器実測図 (S=1/4)



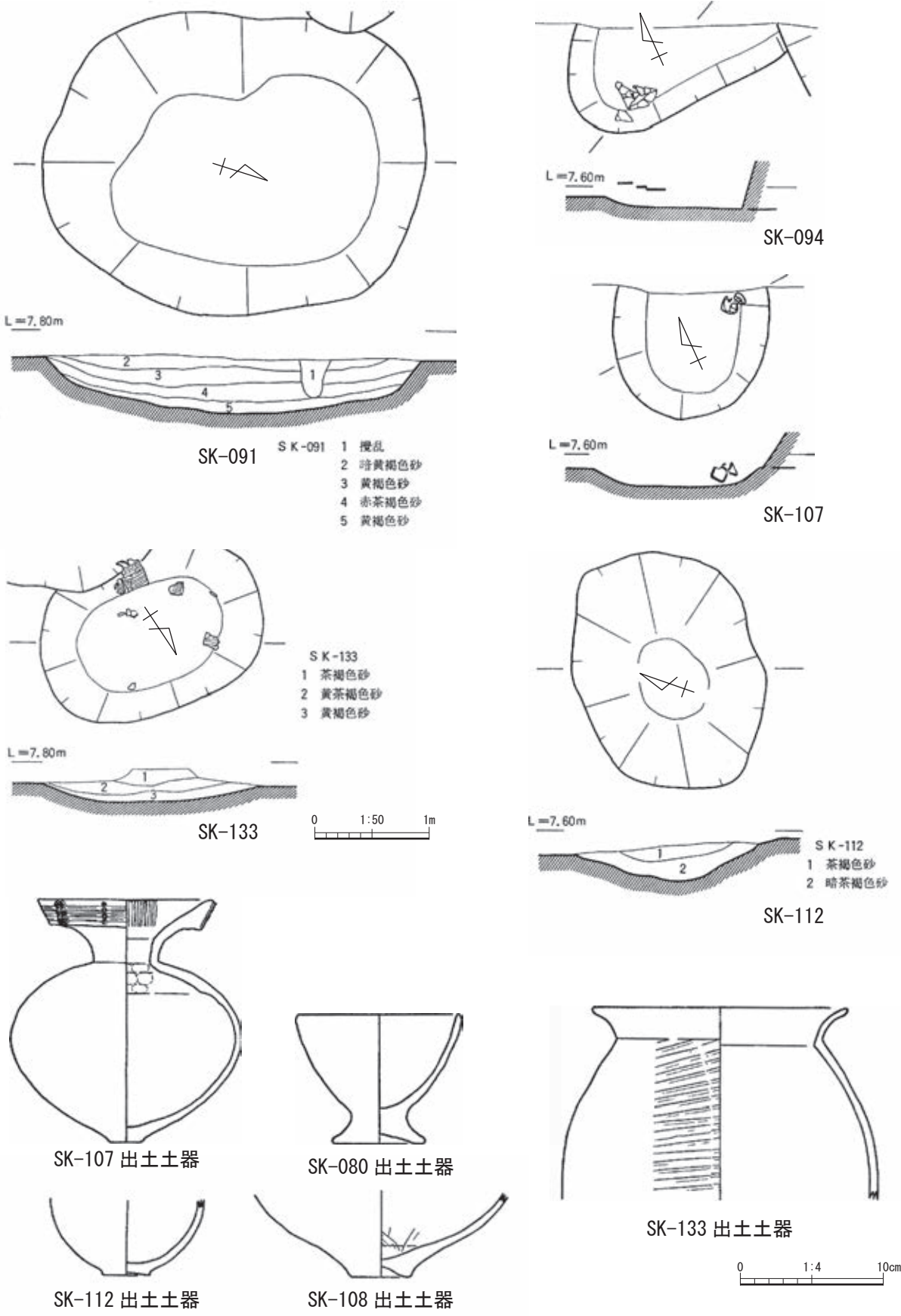


図5 吉原遺跡昭和63年度調査 土壌墓遺構図と土器実測図 (S=1/4)

## ◆ 1. はじめに

和歌山県中・南部地域では、土壙墓を主体とする集団墓を集落から隔絶した海岸砂丘上に営むことが知られており、美浜町吉原遺跡やみなべ町片山遺跡・田辺市田辺城下町遺跡などがある。一方、弥生時代に家族墓として築かれるようになる方形周溝墓については、日高地方では弥生時代中期前葉の吉原遺跡のものが初現で、やや遅れて日高平野の沖積地に位置する御坊市富安Ⅰ遺跡・蛭田坪遺跡でも集落に隣接して築かれるようになる。また、庄内式・布留式併行期の方形周溝墓は、吉原遺跡のほかに御坊市尾ノ崎遺跡や片山遺跡でみつまっている。ここでは当地域の弥生時代から古墳時代の墓制の特色と変化を尾ノ崎遺跡と片山遺跡の事例をもとに紹介する。



図1 遺跡の位置

## ◆ 2. 尾ノ崎遺跡

尾ノ崎遺跡は日高川河口の南にあって、海に向かって細く突き出た尾ノ崎に位置する。立地は標高約 12.0 m の海岸段丘上で、火力発電所設置に伴う発掘調査において、竪穴建物 2 棟、竪穴 4 基からなる集落や方形周溝墓 18 基が検出されている。集落は庄内式新段階のもので、遺物に製塩土器が多く、土錘なども出土していることから製塩・漁労を生業にしていたと考えられている。

方形周溝墓は、18号のみが尾ノ崎の基部付近で見つかっており、1～17号が先端部付近に集中する。このうち1～16号が尾根筋付近に東西に連なるように位置し、17号が尾根筋よりやや北側に下ったところに立地する。1～16号の配置を詳しく見ると、尾ノ崎先端部に1～8号が溝を共有して並び、その北側に9～11号が単独で立地する。1～8号の東には12～15号が一部溝を共有して一列に並んでおり、この並びの南に接して16号が位置する。最も墳丘規模が大きい14号は東西10.1 m、南北11.0 mで、東に長さ5.1 mの撥形の突出部があり、前方後方形を呈する。



図2 尾ノ崎遺跡周辺の遺跡

尾ノ崎の先端付近は開墾されておらず、墳丘も良好に残っていたことから内部主体の明らかなものも多く、これらには木棺直葬、竪穴系石室、土壙などがある。木棺直葬をおこなう1・3・11号では墓壙と木棺の間に棺を固定するかのよう大きな礫を据えており、竪穴系石室の2・15号などでは床に細かい礫を敷いている。遺物は1号の内部主体1から管玉が、供献ピットから土器類が出土しているのをはじめ、3号の主体部からは仿製神像鏡、ガラス製小玉、12号の周溝から鉄斧、15号の主体部から仿製珠文鏡、勾玉、管玉、ガラス製小玉、鉄剣、鉈、

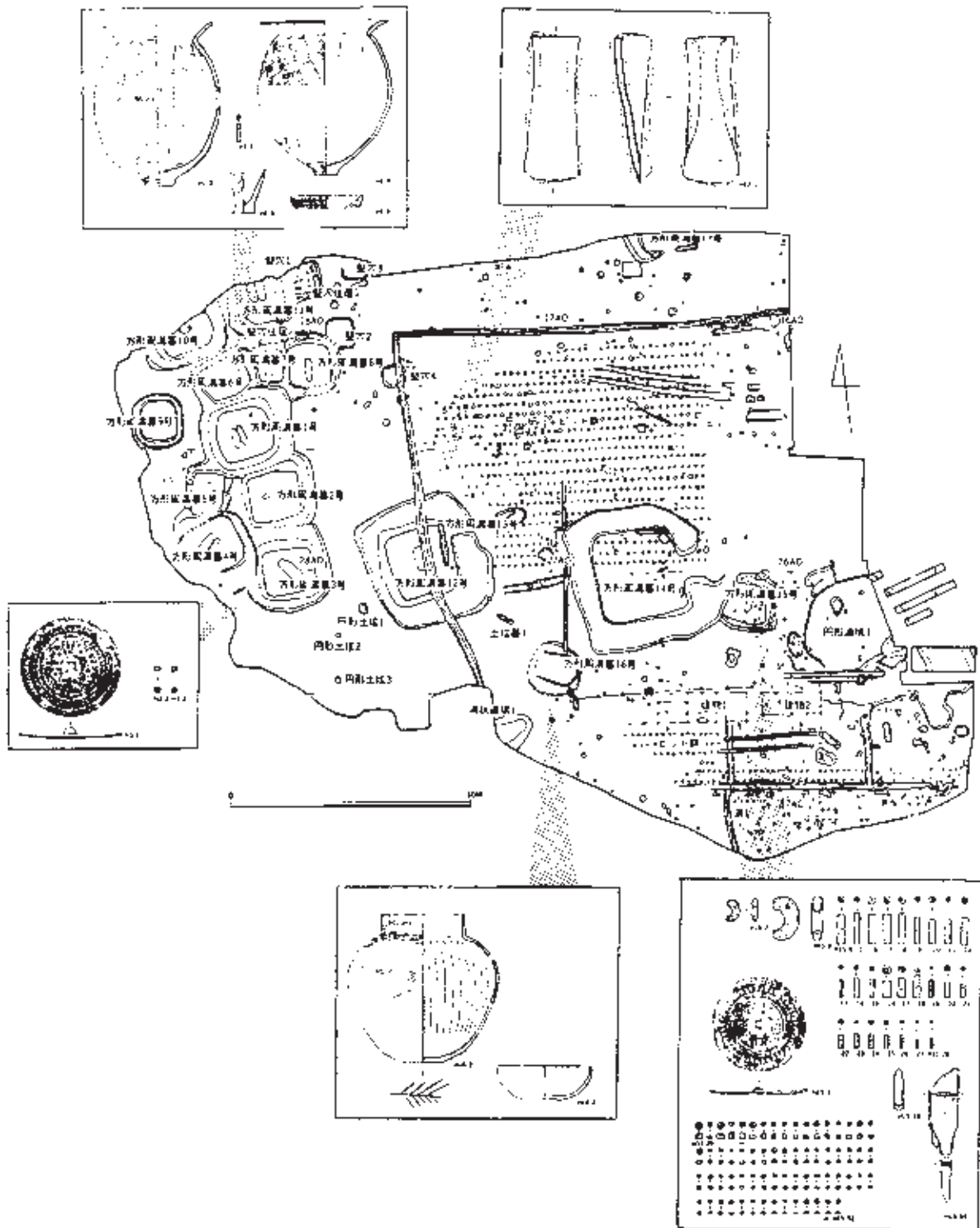


図3 尾ノ崎遺跡

16号の周溝から土器類が出土している。

周溝墓が築かれた時期は、報告書において4世紀後半から5世紀前半の間で2期設定しているが、遺物の時期幅はもう少し大きい。1号の供献ピットから出土した土器類は、庄内式新段階から布留式初頭に位置付けられるものであり、3世紀中頃に比定できる。3号・15号出土の鏡は4世紀代後半代、16号出土の土器類は5世紀初め頃のもので、間断期がないと仮定すれば少なくとも見ても百年以上にわたって墓域を営んでいると考えられる。その仮定に立てば、

造墓はまず集落が営まれている時期か廃絶直後に、尾ノ崎先端部の尾根筋を占地する1号から始まったと考えられ、その後、同系列の家族によって周溝を共有する2～8号がつけられたと解釈することができる。そして周溝を共有しない9～11号が別系列の家族によって営まれたと考えられる。3号は4世紀代後半代であり、それより東の12～16号についても遺物や周溝を共有する状況から、4世紀後半から5世紀初め頃に比定することができ、4世紀後半以降は墳丘規模の拡大に伴って墓域を東に大きく拡張したと捉える事ができる。

周溝を共有し、また主体部を二つもつ1号などのように、当初は家族墓の性格を残すが、時期が下るとともに一人のみの埋葬となり、遺物にも鏡や鉄器が副葬されるなど古墳の出土遺物と遜色がなくなる。庄内甕や布留甕が搬入されるなど、庄内式新段階から布留式初頭頃が当地域が古墳時代に接触した時期とすれば、4世紀代は甕の形態変化に代表されるように弥生色が一掃される時期であり、墓制においても畿内や周辺地域の影響を強く受ける時期でもある。尾ノ崎遺跡においてもこの時期、当初の墓域を飛び出て12号・14号のように墳丘規模も著しく大きくなる。また、墳丘形態に前方後方形を採用するなど、当時の権力構造に組み込まれていく過程を窺うことができる。



写真1 尾ノ崎遺跡(西上空から)  
御坊市教育委員会提供

### ◆ 3. 片山遺跡

片山遺跡は、南部川河口左岸に形成された海岸砂丘上に位置する。南部湾に沿うように弧状を呈して約1.6km伸びる砂丘は、大きくは2時期にわたって形成されたことが現地地形から読み取ることができる。そのうち、古い時期に形成された砂丘稜線付近は、弥生時代から古墳時代にかけて墓地として利用され、高見遺跡・片町遺跡・南部高校校庭遺跡・片山遺跡が北西から南東に繋がっている。



図4 片山遺跡周辺の遺跡

片山遺跡の発掘調査は、昭和 52 年、町道建設に伴い南部高校の南東側（片山遺跡 A 地点）で実施されたのが最初となる。その後、南部高校の校内で発掘調査が 6 次（B～G 地点）にわたって行なわれ、B～D、G の 4 地点で弥生時代から古墳時代にかけての遺構が検出された。これにより、片山遺跡は間断期があるものの弥生時代から古墳時代にかけて長期に継続する墓域であることがわかった。

弥生時代から古墳時代の墓は推定約 30,000㎡の範囲に展開していることが予想されるが、調査した面積は約 3,000㎡と 1/10 程度であり、明確なことは言えないものの、既往の発掘成果から時期によって墓域が違っていることが窺える。

弥生時代前期の墓は、A 地点で土坑 2 基が検出されている。うち 1 基は縄文時代晩期末の突帯文土器・瀬戸タイプの深鉢 2 個体を土器棺として利用したもので、土器の特徴や近くから出土する弥生土器壺から前期中段階から新段階に併行するものと理解することができる。また、周辺からは突帯文土器が後世の遺構などに混入して出土していることから、これらの土坑以外にも存在し、墓域を形成していたと想定できる。

中期前葉から中期中葉の墓は、A 地点にはなく南部高校校庭の B・D 地点の東から G 地点に展開しており、土器棺や土器を供献する土坑墓などが検出されている。

中期後葉の前半は片山遺跡で最も墓域が広く展開する時期で、巾約 44 m の間隔をあけて南北に走る 2 本の溝で区画しており、延長は 90m 以上を測り広大なものとなる。供献土器を底付近や上部に複数置く土壙墓、中央に土器を配置する土壙墓などがある。また、A 地点

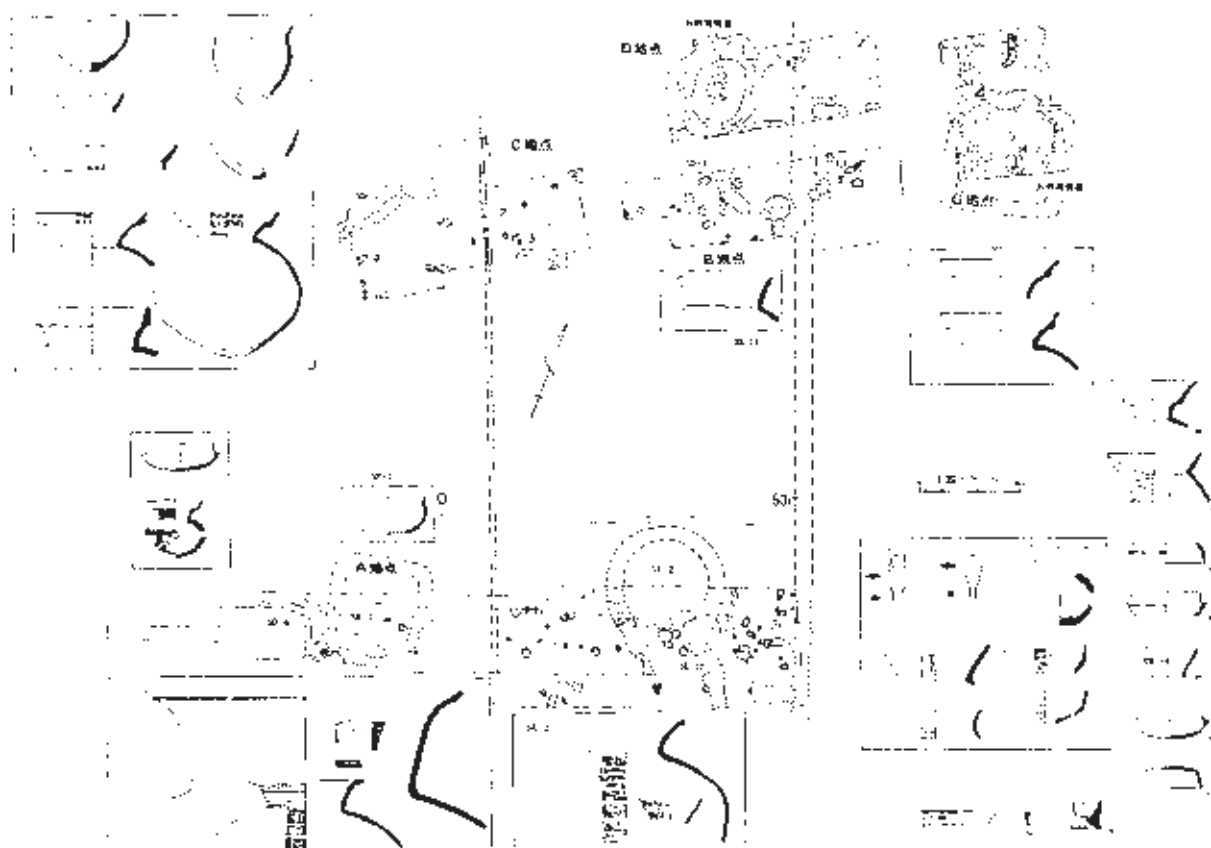


図5 片山遺跡

ではL字型に折れる溝を検出しているが、墓域の東側を区切る溝との組み合わせで方形周溝墓になる可能性もある。このほか、焼土や炭を伴う炉状の土坑も検出しており、祭祀に伴うものである可能性も想定できる。中期の供献土器には甕はなく、壺が主となるが、中期後葉に限れば高杯のほか脚台をもつ壺・鉢、把手を付す壺・鉢など特殊な土器が目立ち、これらの土器にも穿孔されている。

中期後葉末から後期の墓および遺物は見つかっていない。この時期の集落は平野部を離れて丘陵や山上に立地する時期でもあり、集落の動態に連動したものと考えられる。この現象は、吉原遺跡でも窺うことができる。

その後、墓が作られるのは庄内式新段階から布留式初頭になってからで、D・G地点でそれぞれ1基の方形周溝墓が検出されている。D地点の方形周溝墓はマウンド部が南北9.5m、東西7.2mで、西辺に陸橋部をもつ。主体部は土坑で中央に築かれており、土坑の肩口の3方にCの字型に粘土を巡らした特異な構造をもっている。遺物は主体部から出土していないが、周溝の北西隅と南西隅に土器が集中しており、南東隅からも底部に穿孔をもつ完形の壺が出土している。また南辺からは勾玉1個、管玉7個が出土している。G地点の方形周溝墓はマウンド部が南北10.2m以上、東西13.4mで、陸橋部の存在は明らかでない。主体部は中央部で土坑が1基確認されている。遺物は主体部から出土していないが、周溝部から土器や鉄鏃が出土している。なお、この時期の遺物は、砂丘上の片町遺跡でも確認されているほか、同時期の集落として大塚遺跡が知られている。

布留式期になるとA地点で周溝墓(SX-2)が造られる。陸橋部で溝を外方に突出させることで前方後円形にしたもので、後円部の径約12.5mで突出部は長さ4.2m、幅7.6mを測る。主体部は確認されていない。遺物は周溝部から土器や鉄鏃が出土している。

弥生時代から古墳時代前期までの土壙墓や方形周溝墓は、砂丘の稜線より後背側に立地するが、古墳時代中期以降は、稜線より海側にも展開するようになる。A地点では方形周溝墓1基(SX-1)、溝状遺構、土坑が、B・C地点で溝状遺構が検出されている。SX-1は墳丘部が南北8.0m以上、東西10.5mで、周溝の南東部分を掘り残して陸橋部としている。主体部は確認されていない。遺物は周溝部から初期須恵器の大甕・甕などが出土している。このうち大甕は、意図的に破碎したものを溝内に一括投棄したもので、墓前祭祀に係るものと判断できる。また、確認調査で出土している鉄刀もSX-1の遺物の可能性もある。このほか、A地点で6世紀代の須恵器が出土しているのをはじめ、南部高校の校庭に於いても古墳の石室らしきものが検出されている。



写真2 片山遺跡 A地点 SX-2



写真3 片山遺跡 A地点 SX-1

片山遺跡は、弥生時代に集団墓としての性格をもつが、弥生時代後期の間断期以後は有力層の墓域となる。方形周溝墓は主体部が中央に1つで、また前方後円形を呈するものがあるなど、土壙墓などとは一線を画するものである。

#### ◆ 4. まとめとして

尾ノ崎遺跡や片山遺跡で方形周溝墓に系譜を持つ低墳丘墓が造営される一方で、同時期に尾ノ崎遺跡の近くでは岩内3号墳が、片山遺跡の近くでは城山1・2号墳が築かれる。

岩内3号墳は尾ノ崎遺跡の北にあって、日高川河口左岸の丘陵地に築かれた直径28.0mの円墳で幅5.0mの周溝を巡らしている。主体部は木棺直葬で、棺の内外から鏡・玉類・巴型銅器・豎櫛をはじめ豊富な武器・農具・工具などの鉄製品が出土している。城山1号墳は南部川河口右岸の丘陵地に立地し、古い時期に発見され消滅したことから明確でないが、箱式石棺を主体部とする円墳で、鏡や銅鏃・鉄刀のほか琴柱形石製品や玉類が出土したとされる。また、城山2号墳は1号墳の東にあって、南部川に向かって舌状に延びる尾根の先端部付近を占地して築かれている。道路拡張工事により鏡や鉄刀が出土したことで、古墳であると認識されるようになった。ただ、破壊される以前に現地を訪れことがあり、立地や形状から東側に後円部をおく前方後円墳と考えていた箇所である。主体部は石を伴っていないことから、木棺直葬か粘土槨で、1号墳に先行する古墳であった可能性がある。

4世紀末前後に、和歌山県中・南部の主要な平野部では高塚系の古墳が築かれるようになり、その時期に前後するように方形周溝墓の系譜で作られる前方後円形あるいは前方後方形を呈する低墳丘墓が現れる。この時期の古墳としては、先にも触れた岩内3号墳・城山1・2号墳以外に富田川流域の山王古墳があり、可能性として有田川流域の有田市円満寺古墳、さらに広げれば太田川流域的那智勝浦町下里古墳なども挙げる事ができる。これらの古墳の立地場所は、河川流域の主要な平野部の対岸に築かれ、前段階の古墳がなく、また1世代・2世代以降は古墳の造営が続かないことなどの共通点がある。畿内的な高塚系の古墳が突然出現して継続しないことから、被葬者は4世紀後半代に中央から地域に派遣された人物が推定でき、ほぼ同時期に方形周溝墓の系譜で作られる低墳丘墓の被葬者については土着の有力者と考える事ができる。和歌山県中・南部地域では、高塚系の古墳が5世紀前半代以降しばらく造営されなくなり、それにやや遅れて低墳丘墓も築かれなくなるが、これは大和政権の支配体制が一気に浸透しなかったことを物語るのかもしれない。



図6 片山遺跡 A 地点 SX-1 出土の大甕

#### 参考文献

『尾ノ崎遺跡』1981 御坊市遺跡調査会

『片山遺跡 A 地点発掘調査概報』1978 南部町教育委員会 片山遺跡調査委員会

『片山遺跡 G 地点発掘調査概報（県立南部高等学校校庭）』1983 和歌山県教育委員会

『岩内3号墳—日高川流域の中期古墳—』2014 『岩内3号墳』刊行会

---

公開シンポジウム  
方形周溝墓から古墳へ  
～和歌山県内の発掘事例から考える～  
発表資料集

発行日 令和3(2021)年2月20日  
発行 公益財団法人和歌山県文化財センター  
〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の1  
TEL: 073-472-3710  
FAX: 073-474-2270  
URL: <http://www.wabunse.or.jp/>  
印刷 株式会社 協和

---





公開シンポジウム  
**方形周溝墓から古墳へ**  
～和歌山県内の発掘事例から考える～

発表資料集

**公益財団法人 和歌山県文化財センター**

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1  
TEL : 073-472-3710 / FAX : 073-474-2270  
URL : <http://www.wabunse.or.jp/>

